秋田県仙北郡仙北町高梨字田後木3—3
仙北町公民館内
秋田県払田柵跡調査事務所

秋田県文化財調査報告書第39集

下藤根遺跡発掘調査報告書

1976・3

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県教育委員会

序

下藤根遺跡は，秋田県平鹿郡平鹿町中吉田にあり，昭和48年県立博物館，秋田考古学協会の調査で土師器，住居跡等の発見された中藤根遺跡に隣接する遺跡であります。この遺跡が県営圃場整備事業に伴う「秋田県営皆瀬２号幹線水路工事」実施区域内に所在するため，その一部が滅失するおそれがあり，緊急発掘調査を実施しました。この遺跡の調査により，横手盆地内に所在する周知遺跡との関連において，貴重な資料を提供するものと思われます。

本報告書が研究者をはじめ，遺跡に関心を持っておられる方々に広く活用されることを期待すると共に，本報告の刊行にあたり，調査並びに報告書の執筆にあたられた調査員の方々，発掘に際し，ご協力いただきました平鹿町教育委員会の方々に深甚の謝意を表する次第であります。

昭和51年３月

秋田県
埋蔵文化財センター
58. 1. 31
埋蔵文化財収蔵
第　号

秋田県教育委員会
教育長　畠　山　芳　郎

0127

例　　言

1．本報告は，秋田県平鹿郡平鹿町中吉田字下藤根に所在する遺跡の発掘調査報告である。

2．調査期日は，昭和50年7月15日より7月29日までである。

3．調査主体者は，秋田県教育委員会である。

4．調査担当者　富樫泰時，庄内昭男

5．調査参加者

調査補助員　小松正夫，日野久，石郷岡誠一

調査協力者　五十嵐芳郎，伊藤孝憲，船木義勝，畠山憲司，庄内公子，大友俊和
藤原妃敏

地元協力者　佐藤賢作，伊藤吉弥，伊藤耕作，伊藤伸二，伊藤利雄，伊藤博，伊藤厳
伊藤養司，柿崎喜助，柿崎みつ子，藤井春雄，伊藤せい子，藤井まき子
伊藤むつ子

整理作業協力者　谷口重光，小林克，三浦薫，菅原純子，鎌田和子，富樫富士子
古屋久勝，佐藤満，大友幹雄

6．調査協力機関　平鹿町教育委員会

7．本報告の執筆について

Ⅰは，富樫泰時が，Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴは，庄内昭男が執筆した。

編集は，庄内昭男が担当した。

8．遺物について

土器の実測，トレースは庄内昭男が，石器の実測，トレースは庄内公子が行った。

遺物の実測で口縁部が欠損したものについては，欠損の割合に応じて，口縁部の基準線を一部あけた。

遺物は原則として⅓，¼に統一した。実測図と写真図版の番号を合わせた。

第20・21図の石器は½に縮尺した。

9．遺構について

遺構は，1/40，1/20で平板測量した。本報告書の遺構実測図は任意の縮尺となっており，スケールを付している。

遺構のトレースは富樫泰時が行った。

10．図版について

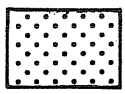
写真図版の作成は，富樫泰時，庄内昭男が行った。

11．出土土器表は，宮城県教育委員会「宮城県文化財調査報告書第25集　東北新幹線関係遺跡調査報告書(1)」を参考にした。

目　　次

序
例　言
目　次
第１図　遺跡の位置および周辺地形図……1
Ⅰ　遺跡の立地と環境……2
Ⅱ　調査経過と概要……4
発掘調査にいたる経過……4
調 査 の 方 法……4
調 査 の 経 過……4
Ⅲ　検出遺構と出土遺物……6
第 1 号 住 居 跡……6
第 2 号 住 居 跡……14
第 3 号 住 居 跡……16
第 4 号 住 居 跡……19
第 5 号 住 居 跡……20
第 6 号 住 居 跡……20
第 7 号 住 居 跡……24
第 8 号 住 居 跡……29
Ⅳ　その他の出土遺物……33
Ⅴ　ま　と　め……36
出 土 土 器 表……38～40
Ⅵ　図　　版……41～58

焼　土


黒色処理

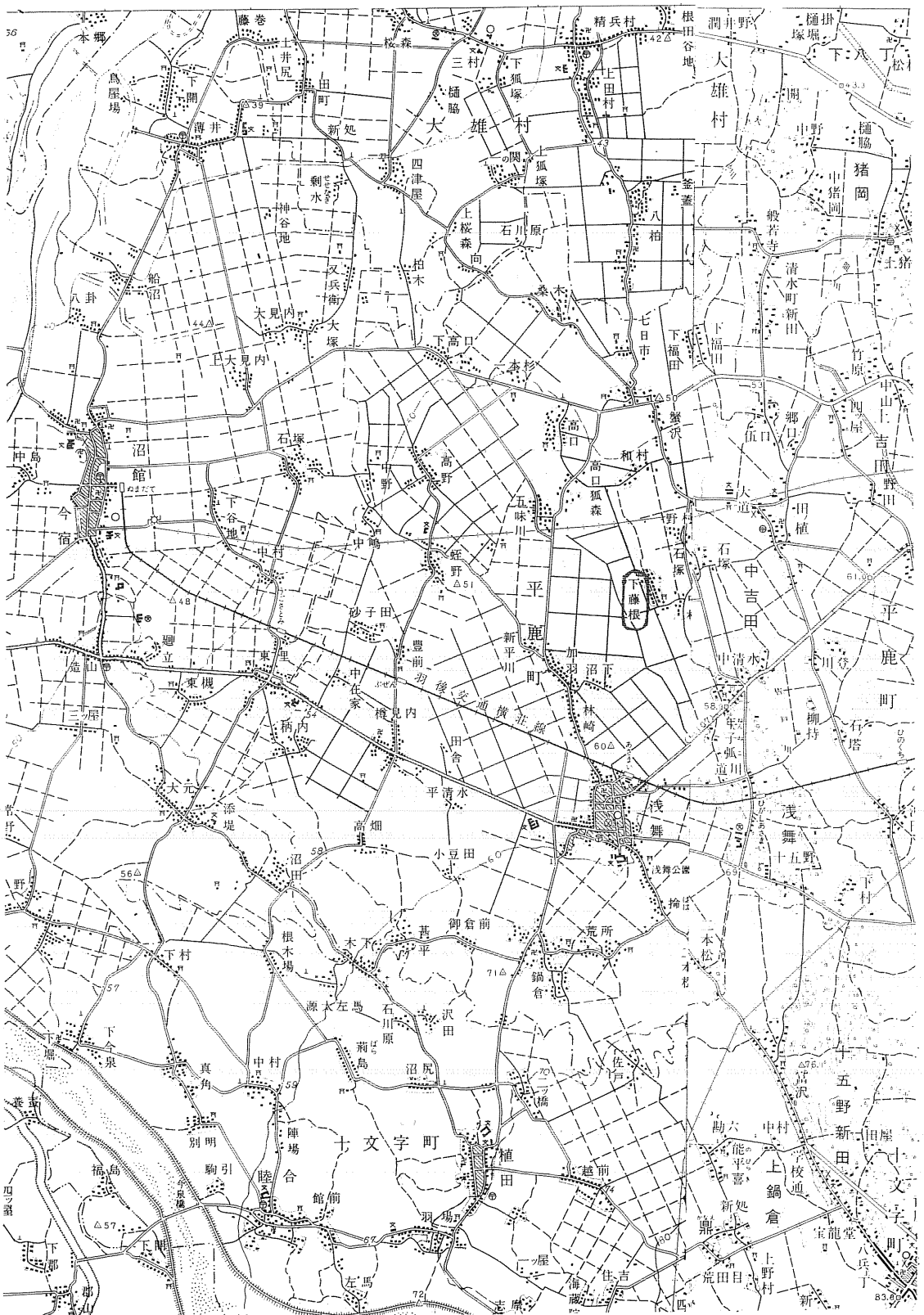
火 床 面

S
石を示す

挿図目次

第１図　遺跡の位置および周辺地形図……１
第２図　遺跡現状図……３
第３図　下藤根遺跡発掘調査遺構分布図…５
第４図　第１号住居跡……７
第５図　第１号住居跡出土遺物(1)……９
第６図　第１号住居跡出土遺物(2)……11
第７図　第１号住居跡出土遺物(3)……13
第８図　第２号住居跡……14
第９図　第２号住居跡出土遺物……15
第10図　第３号住居跡……17
第11図　第３号住居跡出土遺物……18
第12図　第４号住居跡……19
第13図　第５・６号住居跡……21
第14図　第４・５・６号住居跡出土遺物…23
第15図　第７号住居跡……25
第16図　第７号住居跡出土遺物(1)……27
第17図　第７号住居跡出土遺物(2)……28
第18図　第８号住居跡……30
第19図　第８号住居跡出土遺物……32
第20図　その他の出土遺物(1)……34
第21図　その他の出土遺物(2)……35

図版１　発掘調査風景……41
遺跡遠景
図版２　第１号住居跡とグリッド調査……42
第１号住居跡
図版３　第１号住居跡遺物出土状態……43
第１号住居跡カマドと出土土器
第１号住居跡カマド
図版４　第２号住居跡……44
第３・４号住居跡
図版５　第２号住居跡カマド……45
第３号住居跡カマド
第４号住居跡カマド
図版６　第５・６号住居跡……46
第５号住居跡カマド
第６号住居跡カマド
図版７　第７号住居跡……47
第７号住居跡カマド
図版８　第７号住居跡遺物出土状態……48
図版９　第８号住居跡……49
第８号住居跡カマド
図版10　第１号住居跡出土遺物(1)……50
図版11　第１号住居跡出土遺物(2)……51
図版12　第１号住居跡出土遺物(3)……52
図版13　第2・3・4・5号住居跡出土遺物…53
図版14　第６・７号住居跡出土遺物……54
図版15　第７号住居跡出土遺物……55
図版16　第８号住居跡出土遺物……56
図版17　その他の出土遺物……57
図版18　器面調整……58



第1図　遺跡の位置および周辺地形図　　五万分の一

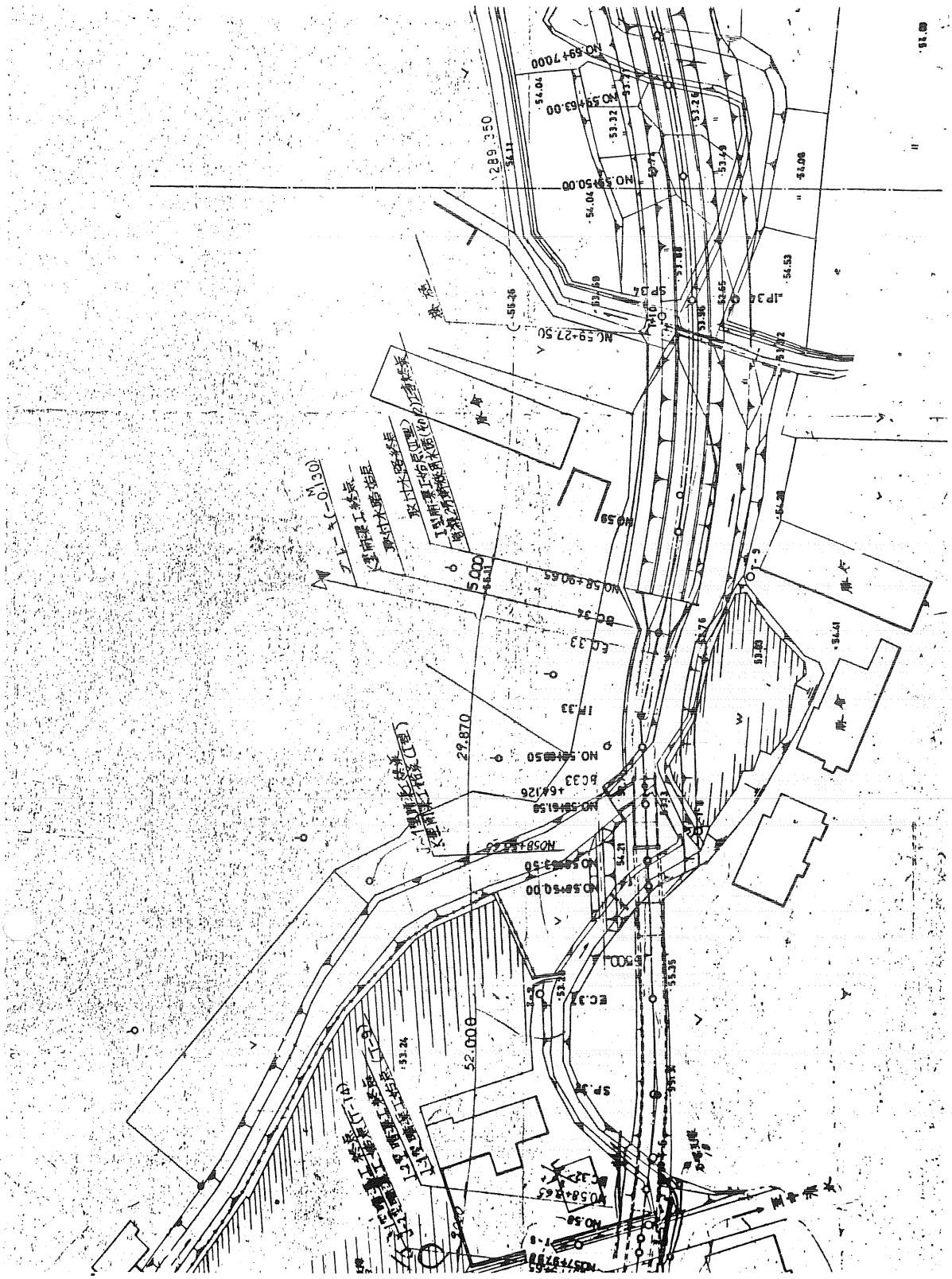
Ⅰ　遺跡の立地と環境

下藤根遺跡は秋田県平鹿郡平鹿町中吉田字下藤根にある。横手市の南西約7㎞のところにあり，標高約55mを測る横手盆地の平担地にある。

一昨年発掘調査した中藤根遺跡（秋田県教育委員会「中藤根遺跡」昭和49年3月）は六ヶ村堰をはさんで東にある。六ヶ村堰は皆瀬川に源をもち，そこから分流して，十文字町，平鹿町を北に流れて大曲市に至っている。平鹿，仙北地区の穀倉地帯の水源として大きな役割をもっている堰である。この堰が何時頃から六ヶ村堰と呼ばれ，その六ヶ村はどの村々を指すかはっきりしないが，かつては清水川（現在俗称としてこう呼ばれている）と呼ばれていた形跡がある。それは真澄の「雪出羽路――平鹿郡八」（秋田叢書6巻412頁・昭和5年10月）によれば「弁財天女，社……藤根村の社也。東に清水川あり，此水上に麿清水，観音清水なンどいふ寒水あり。」とあり，清水川と呼んでいるのである。とすると六ヶ村堰と呼ばれる以前から川としてこの付近を流れていたと考えられるのである。また，この川の流域には下藤根遺跡，中藤根A・B遺跡というように点々と遺跡があり，古代の人々の生活に大きな役割をはたしていたのではないかと推測される。

下藤根遺跡は所謂藤根部落の中心にある。部落を東西に走る道があり，この道と直交して六ヶ村堰が南から北に流れ，この流れを利用した養鯉場，その横に県南食品株式会社がある。遺跡は会社の裏（北）にあり，草地と畑地であった。ここは六ヶ村堰の自然堤防と考えられる。遺跡は発掘調査後豚舎が建てられ，様子は一変している。

下藤根遺跡のある横手盆地には多くの遺跡がある。すなわち周辺の山麓及び丘陵地には旧石器時代から縄文時代の遺跡が，平地には縄文時代後期から晩期，弥生時代，古代と各時代の遺物・遺構が確認されている。その中で下藤根遺跡と直接あるいは間接的に関連あると思われる古代の遺跡は70ヶ所ほどある。（県立博物館第1展示室・後三年の役参照）これらの中には条里制の遺構といわれている地域が直ぐ東側にあり（石母田正「辺境の長者㈠～㈢ 歴史評論」昭和33年1月他）西側には雄勝城の擬定地として調査されている足田遺跡（昭和39年3月他）また少し北には金沢柵跡（昭和43年3月他）払田柵跡（昭和50年3月）などがある。



第2図 遺 跡 現 状 図

II 調査経過と概要

発掘調査にいたる経過

平鹿郡中吉田藤根地区は，圃場整備事業にともない「秋田県営皆瀬２号幹線水路工事」地域内に所在しており，遺跡の一部が破壊されるおそれがあるということであった。藤根地区の遺跡所在については，秋田県遺跡地名表（秋田県文化財報告第１集　昭和33）にも記載されており，昭和48年６月20日から30日までの10日間，伊藤吉弥氏所有の果樹園を氏の協力を得て，発掘調査が行なわれている。調査は，秋田県立博物館の調査委託により，秋田考古学協会があたった。今回の調査区域は，昭和48年度の調査地区であるA地区から，六ヶ村堰の水路を間にはさんで50ｍ程離れた地区であり，小字名は下藤根となっている。地番は，秋田県平鹿郡平鹿町中吉田字下藤根70－２である。以前は，リンゴ園であり，調査直前には，すでに樹木は切り倒され，切り株を残す程度で草地となっていた。

調査の方法

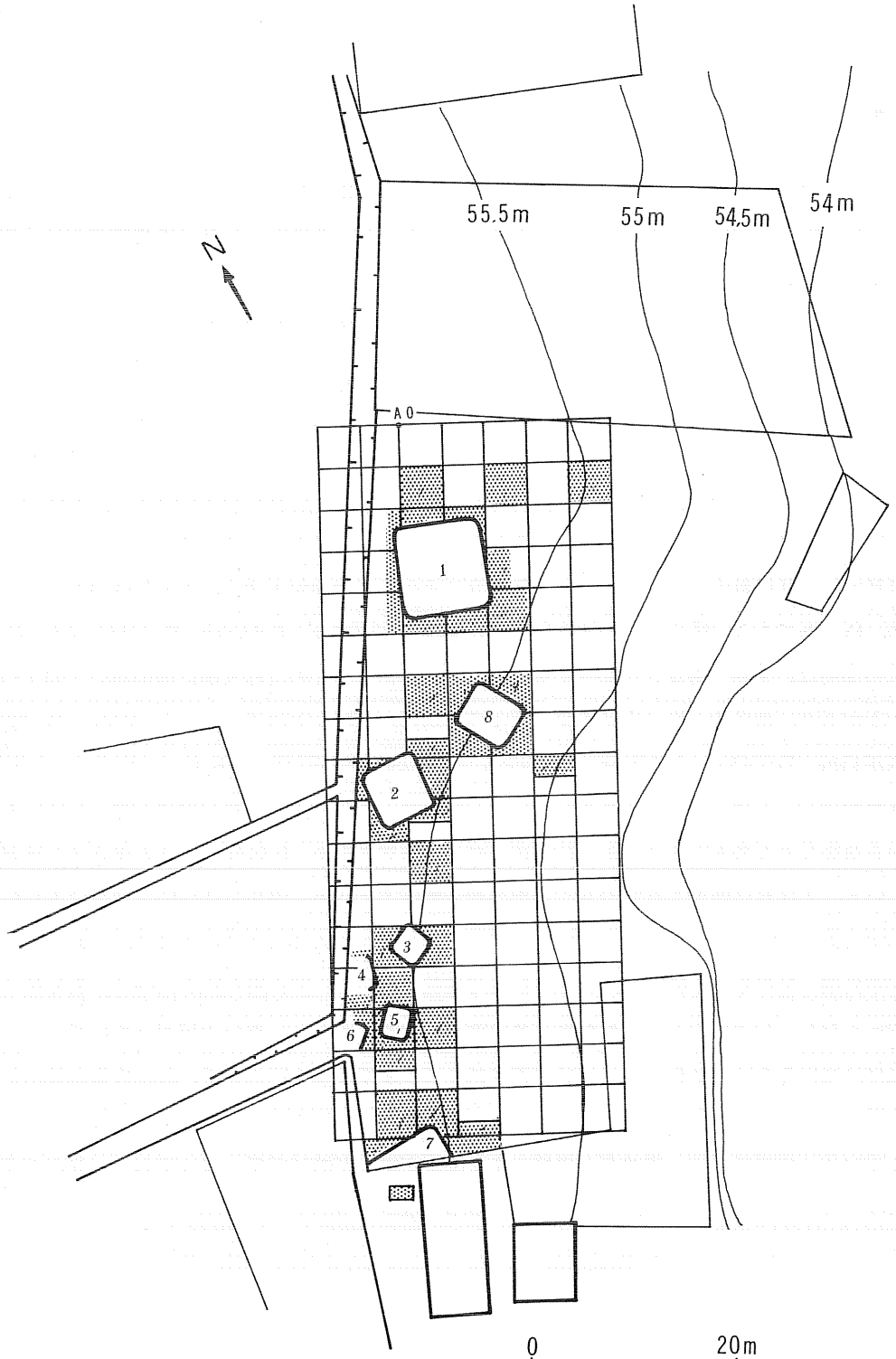
発掘調査予定地は約1,000㎡である。ちょうど調査区域は，東に六ヶ村堰が，西に水田用水路が流れ，区画されている。調査区域は，東の六ヶ村堰に傾斜していく微高地で，北西部が高くなっている。遺構確認のため，この地形を考慮に入れて任意にグリッドを設定してみた。

調査区域の北西隅を原点として，90度の角度で拡げ，４ｍ×４ｍの区画で区切った。東西軸は，原点をA，Fまでのアルファベットで，南北軸は，原点を０，16までの算用数字で表現した。グリッドの名称は，北西隅の杭によって呼ぶことにした。なお東西軸を西にのばしてA′とした。遺構の実測は，すべて平板測量で行った。

調査の経過

調査は，７月15日から29日まで15日間行われた。

７月15日，グリッド設定。A－1，C－1，A－3，A－6グリッドを調査。７月16日，A－4で切り込み面を確認し，第１号住居跡とする。A－2，C－4，B－3を拡張。７月17日，住居跡のセクション図作成。７月18日，D－8を調査。７月19日，第１号住居跡プラン確認。７月20日，A－8，A－10を調査，A－8に切り込み面を確認し，第２号住居跡とする。７月21日，第１号住居跡平板測量。第２号住居跡プラン確認。７月22日，E－1，A－12を調査，A－12に切り込み面を確認し，A′－12を拡張，切り込み面さらに一ヶ所確認し，第３号，第４号住居跡とする。７月23日，A－14，A－16を調査。７月24日，A′－14を拡張し，二ヶ所の切り込み面検出し，第５号，第６号住居跡とする。7月25日，第2, 3, 4, 5, 6の平板測量。A′－15, A′－16, B－16を調査，切り込み面確認し，第7号住居跡とする。7月26日，B－6，C－6グリッドを調査，切り込み面を確認し，第8号住居跡とする。7月27日，第7号住居跡を平板測量。遺跡全体図作成。7月28日，第8号住居跡プラン確認。7月29日，第8号住居跡を平板測量。以上，8軒の竪穴住居跡を検出し，調査を終了した。



第３図　下藤根遺跡発掘調査遺構分布図

III　検出遺構と出土遺物

第１号住居跡

（遺構の確認）　本住居跡は，調査区域内で最も北に位置している。A－２，A－３，A－４，B－２，B－３，B－４，C－３，C－４グリッドをまたいで検出された。遺構確認面は，表土下の地山である。

（平面形・方向）　平面形は，コーナー部がわずかに丸味をもつ形の整った隅丸長方形である。長軸９ｍ20cm，短軸８ｍ40cm，長軸は南北方向を向く。

（壁・床面）　壁高は，東壁で30cm，西壁で25cm程で，ほぼ垂直に落ち込み，地山中の床面に達する。床面は，平担であるが，北側にわずかに下っている。中央部およびカマド付近は踏みかためられたように堅い。西側は攪乱され，凸凹がはげしい。

（周溝）　壁に沿ってめぐり，幅20cm，深さは10cm～15cm程である。西側は判然としない。

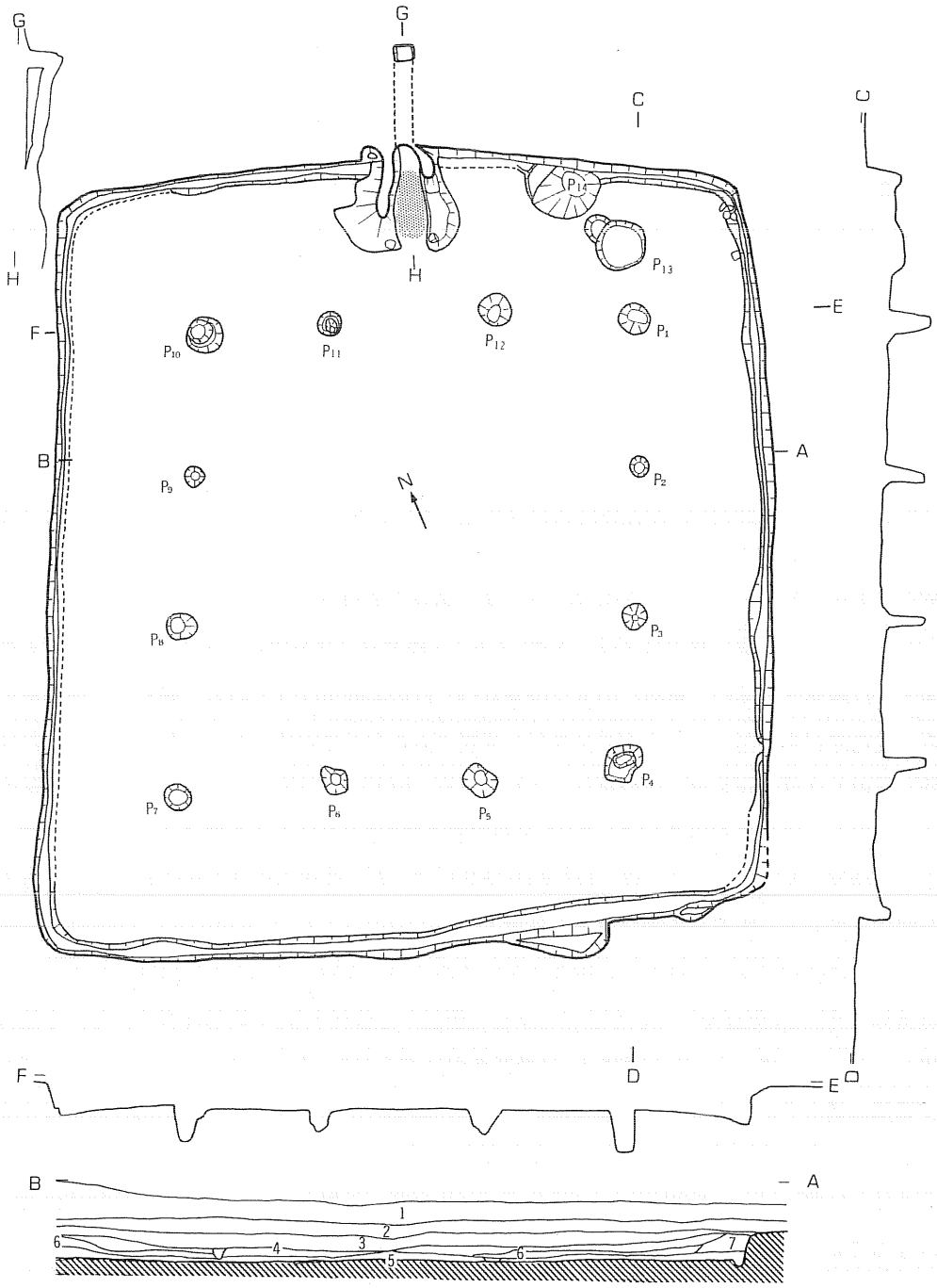
（柱穴）　住居跡内には，ピットが15個あり，そのうち主柱穴と考えられる４個があり，P_1，P_4，P_7，P_{10}である。床面からの深さは，P_1が50cm，P_4が52cm，P_7が46cm，P_{10}が30cmである。柱穴の間隔は，東西，南北５ｍ30cmで正方形の配置である。この主柱穴間に等間隔に２個ずつピットがあり，補助的な柱の役目を果したようである。床面からの深さは，P_2が45cm，P_3が47cm，P_5が42cm，P_6が42cm，P_8が38cm，P_9が45cm，P_{11}が25cm，P_{12}が27cmである。

（カマド）　北壁の中央に構築されている。カマド下には周溝が走り，周溝を掘った後にカマドを構築したものと考えられる。住居内に焚口部と燃焼部を，住居外にのびる煙道部を構築している。天井部は削平されており，袖部の最大幅は１ｍ12cm，煙出し口に向ってすぼまり幅は80cmである。袖部は，暗褐色土を積み上げている。遺存する部分での高さは25cmである。
両袖先端，焚口部近くには河原石を２個たて補強している。焚口部の幅は30cmで，燃焼部でやや広くなり，40cm程である。燃焼部は焚口部よりやや高くなり，堅い火床面となっている。煙道部は地山を直径20cm程トンネル状に掘り抜いて，北壁より１ｍのびて，20cm方形の煙出し口に通じている。煙道部は煙出し口に向けて下り，煙出し口は煙道部よりさらに一段深く掘り込んでいる。使用状況は，燃焼部の側壁および床面がかなり焼けて堅くなっており，煙道部では側面が暗赤褐色に焼けていた。燃焼部に長胴甕形土器が横たわって発見された。

（その他の遺構）　P_{13}は，深さ16cmの浅いピットであり，10cmの厚さで焼土が入り込んでいた。

〈第１号住居跡出土遺物〉　（第５図・第６図・第７図）・（図版10・11・12）

出土遺物は，甕形土器，甑形土器，壺形土器，坏形土器，高坏形土器，紡錘車である。



1．表　土
2．黒色土　較質
3．黒色土　較質
4．灰黒色土　較質
5．暗褐色土　砂混入
6．黒色土　軟質
7．黒色土　黄色粒子混入
　空らん、撹乱

0　2m

第4図　第1号住居跡

甕形土器（１～６）

１は，口径21.5cm，器高30.1cm，底径6.8cm，口縁部に最大径がある。口縁部は外反し，頸部に小さな段をもつ。なお口辺部は角ばっている。胴部は長胴形を呈する。底部は安定性のある平底であり，木葉痕が付されている。胴部中位より下の内面には輪積痕が一条めぐっている。器面調整は，胴部外面はタテ方向の刷毛目が，内面はヨコ方向の刷毛目が施されている。胴部から口縁部内外面まで炭化物の付着がみられ，内面底部から胴部上半まで二次的な火熱のため表面が剥落している。色調は黄褐色を呈する。

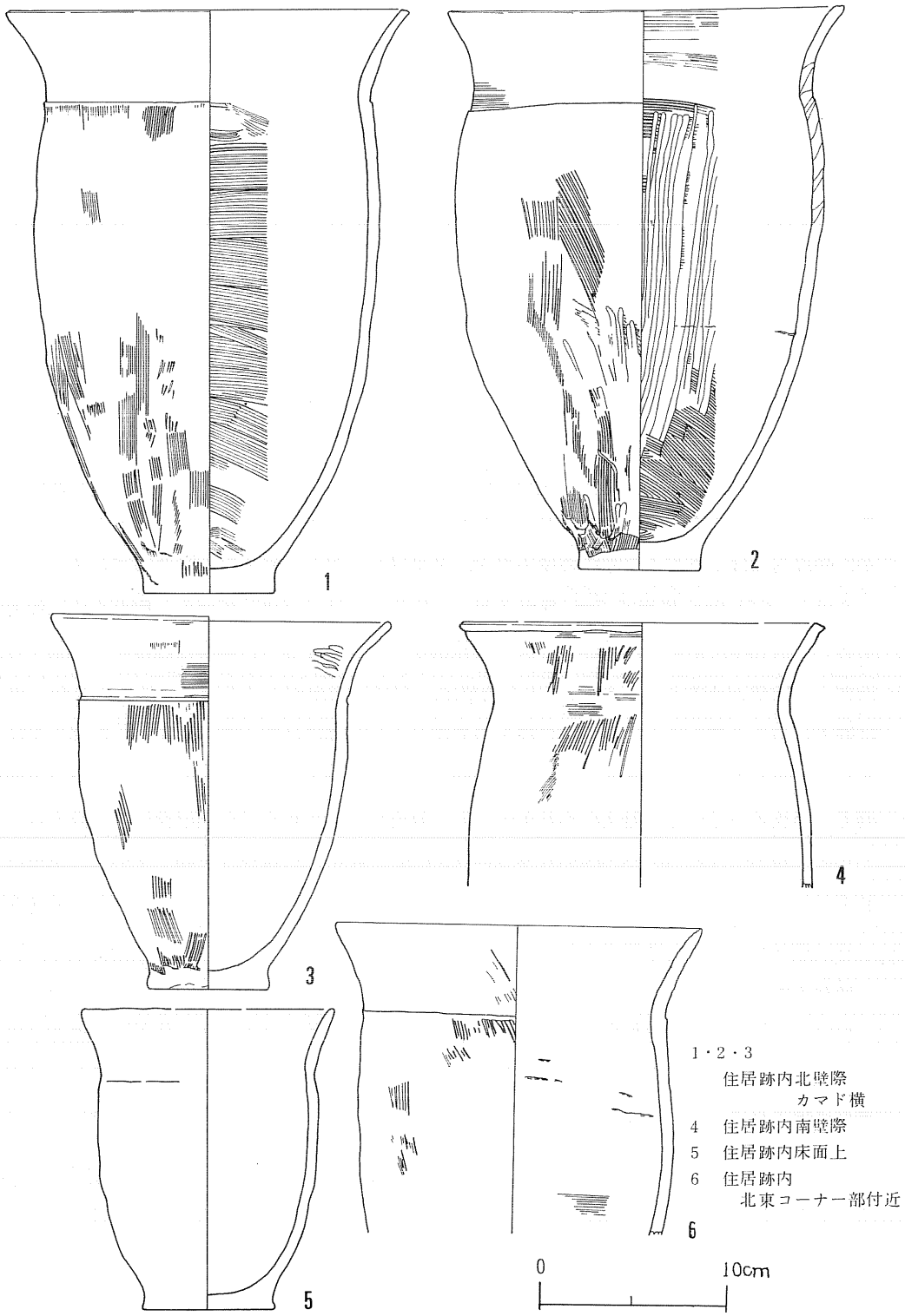
２は，口径21.1cm，器高30.0cm，底径6.5cm，口縁部に最大径がある。口縁部は外反し，頸部に小さな段をもつ。口辺部はそぎとったように角ばっており，中に軽く沈線が入る。胴部は長胴形を呈する。底辺部はわずかに突き出し，安定性のある平底であり，木葉痕が付されている。胴部中位より下の内面には輪積痕が一条めぐっている。器面調整は，外面に刷毛目痕が残るが，口縁部内外面は横ナデが，胴部は外面にタテ方向のこまかい刷毛目が，内面はヨコ方向の刷毛目と一部にタテ方向のヘラミガキが施されている。胴部外面に炭化物の付着がみられ，内面下半は二次的な火熱のため 表面が剥落している。焼成は良好であり，色調は褐色を呈する。

３は，口径17.0cm，器高20.0cm，底径5.9cm，口縁部が一部欠損している。口縁部に最大径がある。口縁部は外反し，頸部に小さな段をもつ。口辺部は角ばっている。胴部は長胴形を呈する。底辺部が突き出し，木葉痕の付された平底であるが，安定性はない。器面調整は，口縁部外面に刷毛目痕が残るが，段の部分まで横ナデが，内面はヨコ方向のヘラミガキが，胴部外面はタテ方向の刷毛目が施されている。なお底辺部の突き出したまわりを指頭で調整した痕跡がある。口縁部から胴部内面は一様に炭化物が付着している。底部内面は二次的な火熱のため表面が剥落している。外面の色調は褐色を呈する。

４は，口径19.3cm，口縁部から胴部にかけて四分の一程残っている。口縁部に最大径がある。口縁部は外反し，頸部が「く」の字状にくびれて胴部へと移行する。口辺部は張り出し，中位に沈線が一条めぐっている。器面調整は，口縁部外面はタテ方向の刷毛目痕が残り，口縁部先端および頸部に横ナデが，胴部上半外面にはタテ方向の刷毛目が施されている。胴部外面に炭化物が付着している。胎土に小石を含むが，焼成は良好であり，色調は褐色を呈する。

５は，口径13.5cm，器高16.0cm，底径7.0cm，口縁部から胴部下半にかけて半分程欠損している。口縁部に最大径がある。口縁部は外反し，頸部にわずかなくぼみをもつ。胴部は長胴形を呈する。底辺部が突き出し，安定性のある平底で，木葉痕が付されている。器面調整は，口縁部，胴部ともに判然としない。内面は炭化物が一様に付着している。色調は褐色を呈する。

６は，口径19.4cm，口縁部から胴部上半にかけて半分程残っている。口縁部に最大径がある。口縁部は外反し，頸部に小さな段をもつ。器面調整は，摩滅して判然としないが，体部上半外面はタテ方向，内面はヨコ方向の刷毛目が施されている。色調は白褐色を呈する。



第5図　第1号住居跡出土遺物(1)

甑形土器（７）

７は，口径23.8cm，器高27.6cm，孔径8.8cm，ちょうど長胴甕形土器の底を欠いた形である。口縁部に最大径がある。口縁部は外反し，頸部に小さな段をもつ。段の上にはさらにわずかに稜がつく。口辺部は角ばって張り出す。胴部は長胴形を呈する。孔は内側をそぎとったようになっており，孔の下から１cm～２cmの間に，対になるように直径８mm程の小孔を二つ穿っている。器面調整は，口縁部は外面に刷毛目痕が残るが，内外面ともに横ナデが，胴部外面は上半にタテ方向の刷毛目が，下半にヘラナデが，内面はヨコ方向の刷毛目が施されている。胎土に小石を含むが，焼成は良好であり，色調は一部黒色であるが，黄灰色を呈する。

壺形土器（８～10）

８は，口径13.7cm，器高21.4cm，底径7.3cm，口縁部から胴部下半にかけて二分の一程欠損している。胴部中位に最大径があり，22.0cmである。口縁部はやや外反し，頸部が「く」の字状にくびれて胴部へと移行する。胴部は中膨みである。底部は平底で，安定性がある。内面に輪積痕が数条みられる。器面調整は，内外面とも判然としないが，胴部下半外面にはタテ方向の刷毛目が，胴部内面は上半が不定方向の刷毛目が，下半はヨコ方向の刷毛目が施されている。

９は，口径21.0cm，現高23.7cm，胴部下半から底部にかけて欠損している。胴部中位に最大径があり，27.5cmである。口縁部は外反し，頸部に小さな段をもつ。胴部はほぼ球形を呈する。内面には輪積痕が数条みられる。 器面調整は，口縁部内面がヨコ方向のヘラミガキが，外面は刷毛目のあとでヘラミガキが，口縁部の先端および頸部には横ナデが施され，胴部上半は外面がタテ方向の刷毛目のあとでヘラミガキが，内面はヘラミガキが，下半になるとヨコ方向の刷毛目が施されている。胎土に小石が混入し，焼成は良好であり，色調は黄灰色を呈する。

10は，現高5.2cm，底径3.9cmの小形の手捏土器であり，口縁部は欠損している。胴部は球形を呈し，底近くでくびれ，底部は丸味をおびている。内面に輪積痕が一条めぐり，炭化物が一様に付着している。外面の色調は暗灰色を呈する。

坏形土器（11～12）

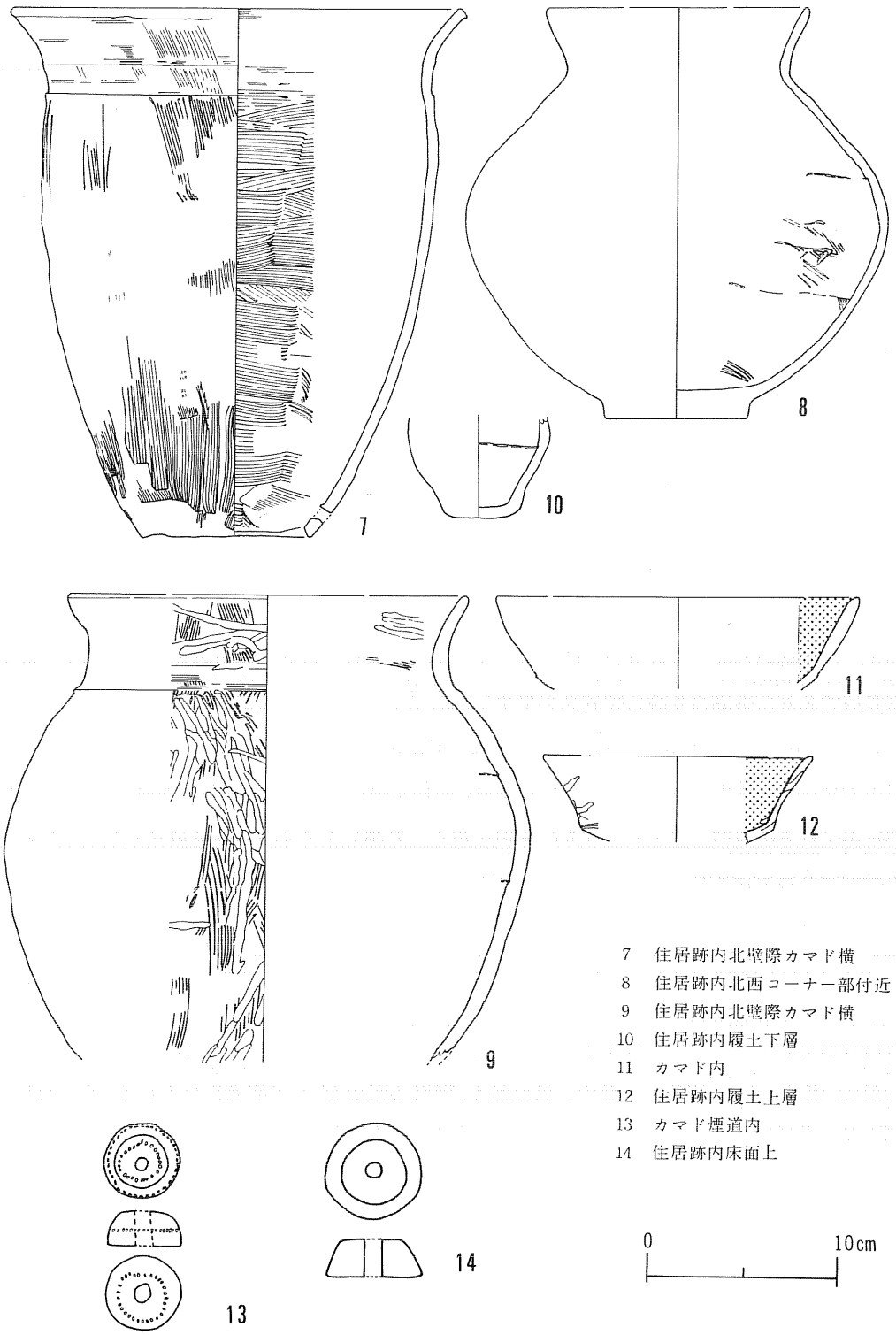
11は，口径19.0cm，口縁部が四分の一程残っている。口縁部は内弯し，体部下半外面に段をもつ丸底坏である。器面調整は，口縁部内外面ともにヨコ方向のヘラミガキが施され，内面は黒色処理されている。

12は，口径14.0cm，口縁部がわずかに残る。口縁部は外反し，体部下半外面に段をもつ丸底坏である。器面調整は，口縁部内外面ともヨコ方向のヘラミガキが施され，内面は黒色処理されていたようであるが，摩滅している。外面の色調は黒色を呈する。

紡錘車（13～14） いずれも土製である。

13は，直径５cm，焼成は良好でなく，色調は黄灰色を呈する。

14は，直径3.9cm，表裏面と側面に各一条の刺突列がめぐる。焼成は良好，色調は灰色を呈する。



7　住居跡内北壁際カマド横
8　住居跡内北西コーナー部付近
9　住居跡内北壁際カマド横
10　住居跡内履土下層
11　カマド内
12　住居跡内履土上層
13　カマド煙道内
14　住居跡内床面上

第6図　第1号住居跡出土遺物 (2)

高坏形土器（15～21）

15は，口径14.8cm，脚部裾径10.2cm，口縁部が一部欠損している。坏体部上半に最大径がある。坏部は口縁部が内弯し，体部下半外面に段をもつ。脚部は上半がせばまる筒形で，裾が「ハ」の字状にひろがる。器面調整は，坏口縁部は内外面ともにヨコ方向のヘラミガキが，内面下半は中心に向けて放射状のヘラミガキが施され，黒色処理されている。脚部は判然としない。焼成は良好であり，外面の色調は口縁部にかなり黒色がくい込んでいるが，他は黄灰色を呈する。

16は，口径20.4cm，坏部が四分の一程残る。坏体部は内弯ぎみにひろがり，中位が角ばり，口縁部が短く内弯する。器面調整は，口縁部内外面ともにヨコ方向のヘラミガキが施され，内面は黒色処理されている。外面の色調は口縁部にかなり黒色がくい込んでいるが，他は黄灰色を呈する。

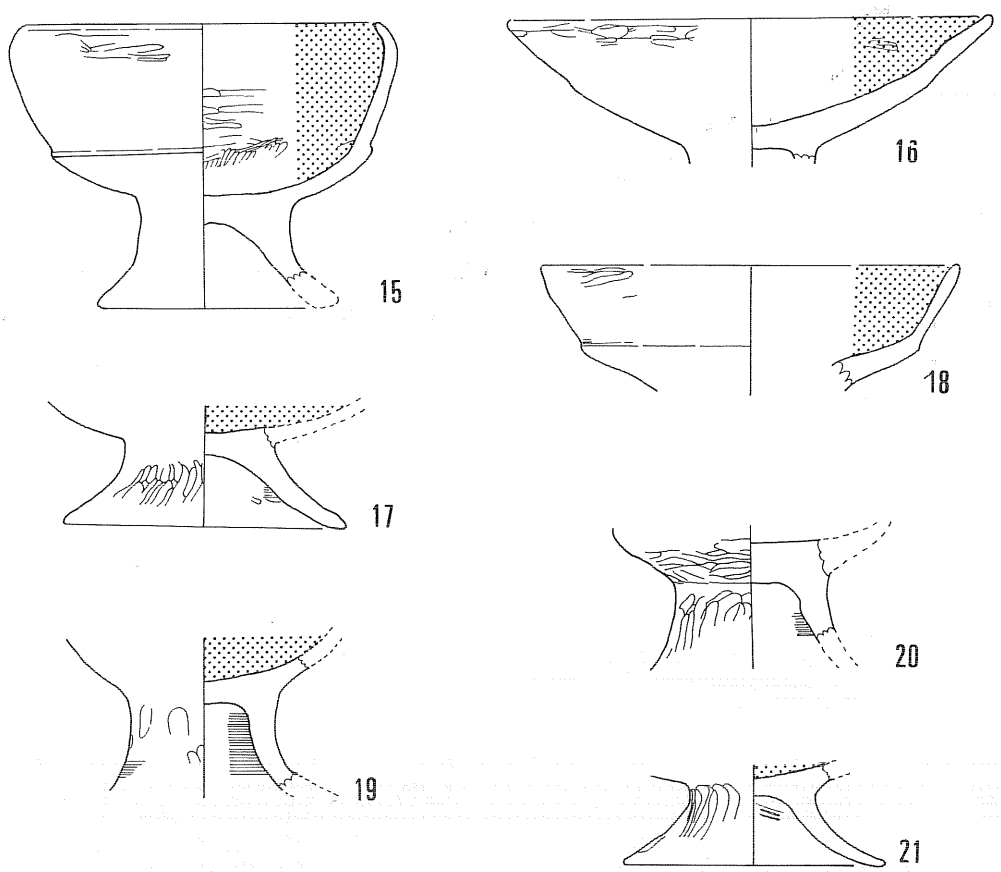
17は，現高5.1cm，脚部裾径11.8cm，脚部と坏部の一部が残る。脚部は裾まで「ハ」の字状にひろがる。器面調整は，坏底部の内外面ともにヘラミガキが施され，内面は黒色処理されている。脚部外面はタテ方向のヘラミガキが，内面は裾にヨコ方向のヘラミガキと一部に横ナデが施されている。外面の色調は黄灰色を呈する。

18は，口径17.6cm，坏部が半分程残る。口縁部は内弯し，体部下半外面に段をもつ。器面調整は，口縁部内外面ともにヨコ方向のヘラミガキが施され，内面は黒色処理されている。焼成は良好であり，外面の色調は黄灰色を呈する。

19は，現高6.3cm，脚部と坏部の一部が残る。脚部は上半がせばまる筒形で，裾がひろがる。器面調整は，坏部内面はヘラミガキが施され，黒色処理されている。脚部は内面に横ナデを，外面は上半にタテ方向のヘラミガキを，裾部に横ナデを施している。焼成は良好であり，外面の色調は黄灰色を呈する。

20は，現高5.9cm，脚部と坏部の一部が残る。坏体部下半に段をもつが，上半は欠損している。脚部は上半がせばまる筒形で，裾が「ハ」の字状にひろがる。器面調整は，坏部内外面ともにヘラミガキが，脚部外面はヘラミガキが，内面は横ナデが施されている。焼成は良好であり，色調は内外面ともに黄灰色を呈する。

21は，現高4.2cm，脚部と坏部の一部が残る。脚部は裾まで「ハ」の字状にひろがる。器面調整は，坏底部の内外面ともにヘラミガキが施され，内面は，黒色処理されている。脚部外面は，タテ方向のヘラミガキが，内面は上半にあらい刷毛目痕が残る。外面の色調は黄灰色を呈する。



0　10cm

19・20　住居跡内履土下層
16　住居跡内北壁付近履土下層
17・18　住居跡内北壁際カマド横
21　住居跡内東壁際

第7図　第1号住居跡出土遺物 (3)

第２号住居跡

北西コーナー部は，水田用水路がそばを流れ，調査できなかった。

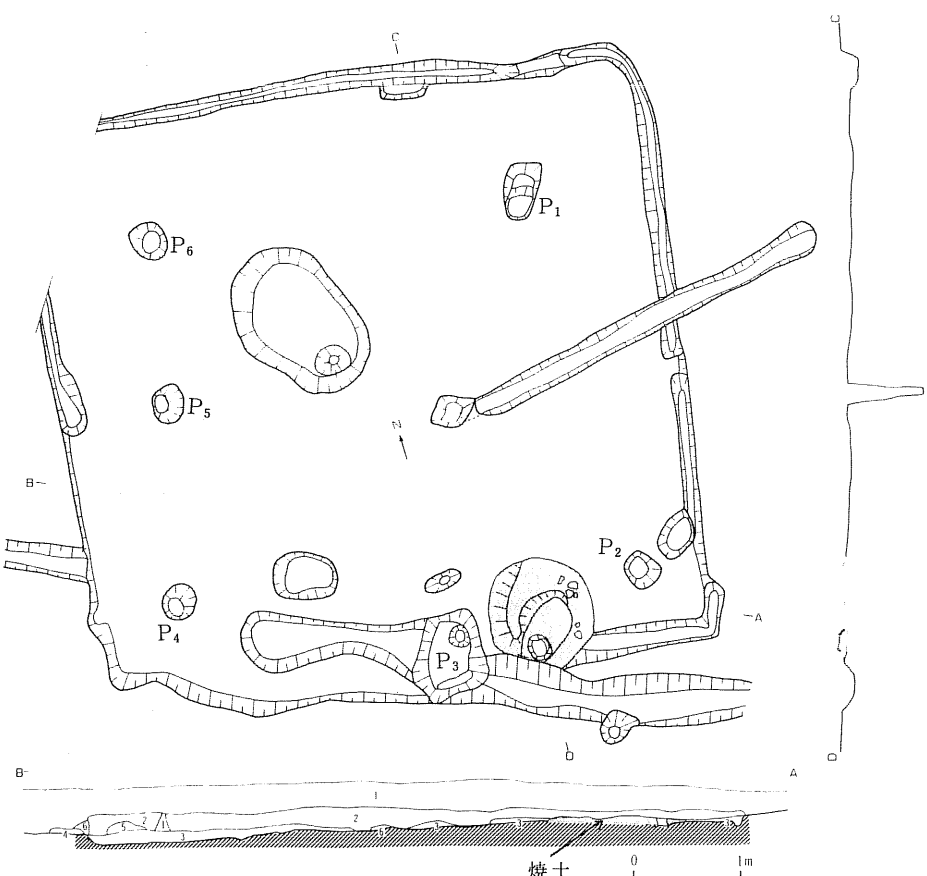
（遺構の確認）　本住居跡は，調査区域中央，A－８グリッドで東壁の切り込み面を確認し，西側にA′－８，南側にA－９，A′－９を拡張した。遺構確認面は，表土下の地山である。

（平面形・方向）　平面形は，コーナー部がわずかに丸味をもつ隅丸正方形であるが，南壁に沿って溝が走り，壁とカマドの一部を削平している。長軸５ｍ75cm，短軸５ｍ65cm，方向は南北。

（壁・床面）　壁高は，北壁で10cm，東壁，西壁で20cmであり，斜めに落ち込み，地山中の床面に達する。床面は，ほぼ平担であるが，中央はリンゴ樹木の抜根により攪乱されている。

（周溝）　西壁の南半を除き，壁に沿って幅20cm，深さ10cm程の浅い溝がめぐる。

（柱穴）　住居内にピットは７個あり，主柱穴とおもわれるのは，そのうちのP_1，P_2，P_4，P_6の四個であり，床面からの深さはP_1は54cm，P_2は28cm，P_4は18cm，P_6は78cmである。P_5は37cm。



1　表　土
2　黒色土　較質
3　暗褐色土　黄色ブロック混入
4　暗褐色土
5　炭化物包含
6　黄色土ブロック

第８図　第２号住居跡

（カマド）　南壁東寄りに構築されている。焼土が長さ１ｍ，幅95cmの範囲にたかまりをもっているだけで構造は判然としない。壁際に口を下にして甕形土器の口縁部が残っていた。

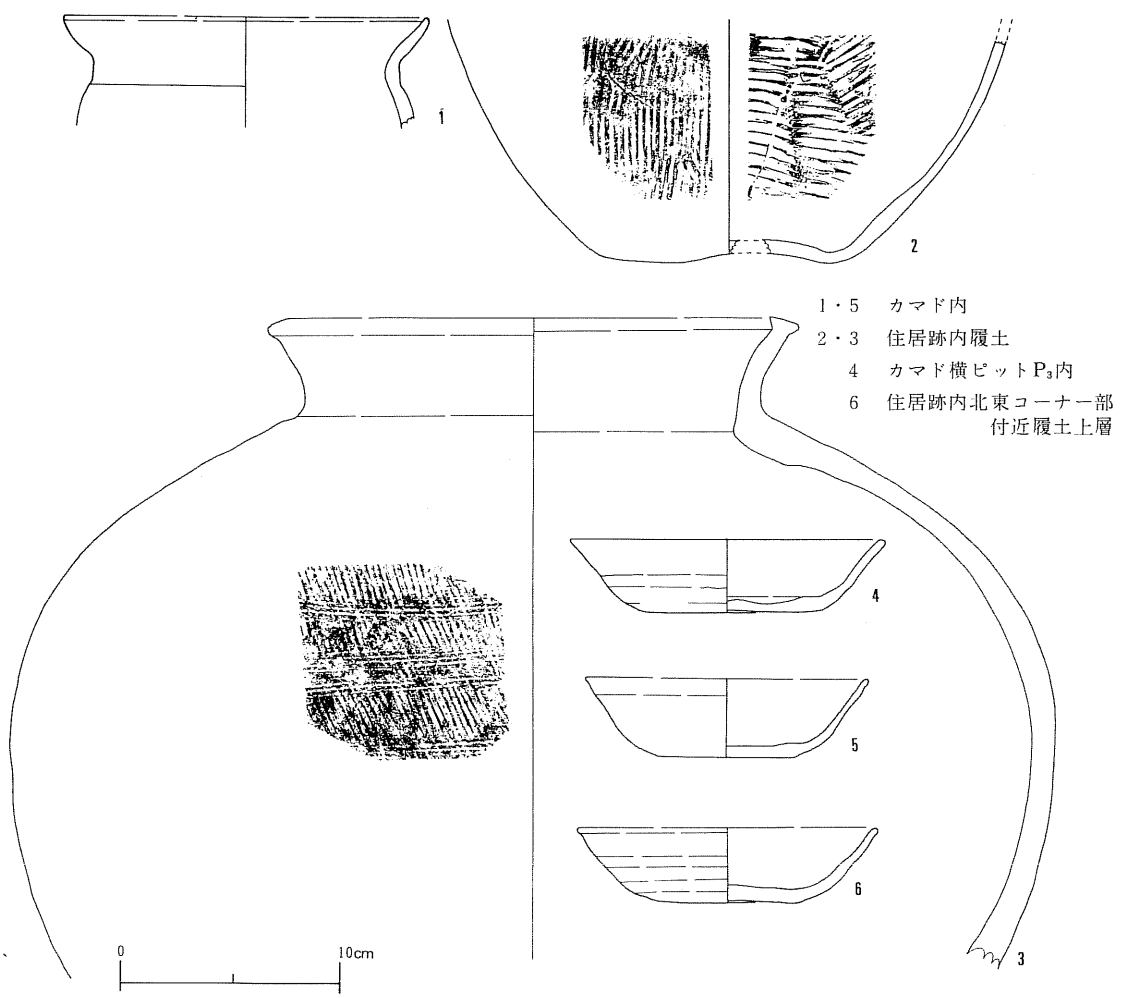
（その他の遺構）　カマド横の不整形なピットP_3は，上半を溝により掘り込まれているが，白色粘土がつまり，南壁にそって長さ35cm，幅８cmの炭化物が検出され，ヘラ切り痕を残す須恵器坏底部など土器片が多く出土した。東側に住居外から壁および床面を斜めに切り込む細長い溝は，幅25cm，長さ３ｍ50cm，深さ40cm程を測り，断面はV字を呈し，黒色土が充塡していた。

〈第２号住居跡出土遺物〉　（第９図）・（図版13）

出土遺物は，須恵器，土師器の甕形土器と須恵器の坏形土器である。

甕形土器（１～３）　１は土師器，２・３は須恵器である。

１は，口径16.4cm，口縁部だけが残っている。頸部に小さな段をもつ。口縁部は段の部分よりまっすぐ立上り，上半で内弯ぎみにひろがる。色調は褐色を呈する。



第９図　第２号住居跡出土遺物

2は，現高11.0cm，底径11.0cm，胴部下半と底部が残る。底部は上げ底ふうで，胴部との境いは丸味をおびている。内外面底部まで平行タタキ目が付されている。色調は暗灰色を呈する。

3は，口径24.0cm，現高29.4cm，胴形47.0cm，須恵器の甕形土器である。胴部下半から底部にかけて欠損している。外面にはナナメ方向のタタキ目の上に等間隔の平行な沈線が施される。外面には自然釉がかかり，色調は黄灰色を呈する。

坏形土器（4～6）

4は，口径14.2cm，器高3.3cm，底径7.7cm，底部に回転ヘラ切り痕を残す。

5は，口径12.8cm，器高3.6cm，底径6.1cm，底部に回転ヘラ切り痕を残す。

6は，口径13.6cm，器高3.3cm，底径6.4cm，底部に回転糸切り痕を残す。

第3号住居跡

（遺構の確認）　本住居跡は，調査区域中央よりやや南寄り，A－12，A′－12グリッドに検出された。遺構確認面は，表土下の地山である。

（平面形・方向）　平面形は，コーナー部がかなり丸味をもつ隅丸長方形である。長軸3m55cm，短軸3m25cm，長軸は東西方向を向く。

（壁・床面）　壁高は四方向20～28cmであり，なだらかに落ち込み，地山中の床面に達する。床面は平担で，中央部およびカマド付近は堅い。

（柱穴）　住居跡とその周辺にピットは12個あり，西側に集っている。配置に規則性はなく，深さも様々であることから，柱穴と判断されるものはない。ただし，住居内のピットのいずれにも焼土が混入している。特にP_3，P_5においてP_3の底が焼け，P_5は焼土，炭化物の混入が多く，東西壁に平行して相対し，床面から深さがいずれも31cmであることから，柱穴とも考えられる。その他のピットの床面からの深さは，P_1が21cm，P_2が14cm，P_4が28cm，P_6が19cm，P_7が25cm，P_8が14cm，P_9が13cm，P_{10}が24cm，P_{11}が35cm，P_{12}が27cmである。

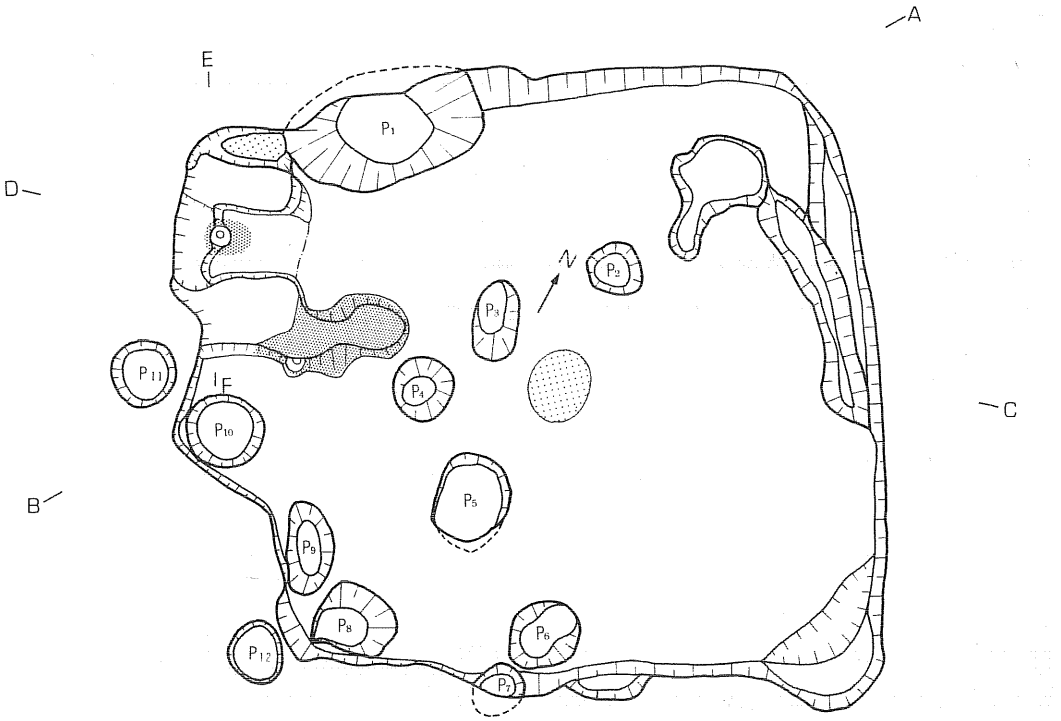
（カマド）　西壁の北西コーナー寄りに構築されている。上面で天井部および煙道部が削平されているが，袖部は遺存し，規模は壁まで長さ68cm，幅105cmである。煙道部に向かってややせばまり，袖部は黒色土，暗褐色土が積み上げられている。焚口部の幅は約50cm，燃焼部もほぼ同じ幅である。焚口部から燃焼部へは上りの段がつき，上り口には坏がさかさにふせてあり，支脚の代用と考えられる。使用状況は燃焼部坏周辺に焼土がみられる。又，左袖の南側に60×30の幅で，右袖の横にもかなりの焼土のたかまりがみられる。

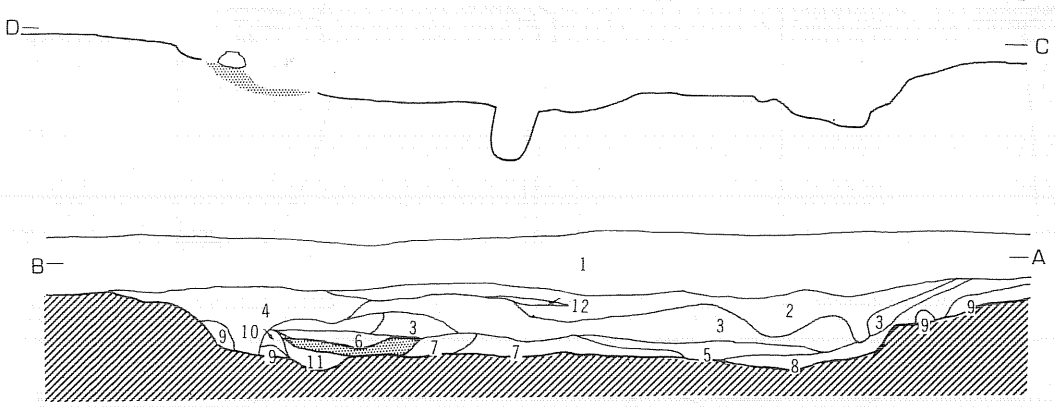
〈第3号住居跡出土遺物〉　（第11図）・（図版13）

出土遺物は，甕形土器，坏形土器である。

甕形土器（1～2）

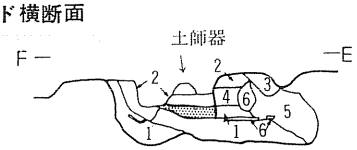
1は，口径21.3cm，口縁部が五分の一程残っている。口縁部は外反し，口辺部が肥厚し，外





1　表　土
2　黒 色 土
3　赤褐色土　焼土・黄色粒子混入
4　赤褐色土　軟質
5　黒色土　黄色粒子混入
6　褐色土　黄色粒子混入
7　焼　土　黄色粒子混入
8　褐色土　黄色粒子混入
9　黄色土ブロック
10　黄色土　焼土混入
11　黄色土　軟質
12　黒色土　黄色粒子混入

カマド横断面



1　暗褐色土
2　黒色土
3　黄色土　焼土混入
4　暗褐色土　炭化物混入
5　暗褐色土　黄色粒子・炭化物混入
6　黄色土ブロック

0　1m

第10図　第 3 号住居跡

面に稜をもち，内側に丸く入り込む。口縁部にロクロ痕が残っている。胴部外面に炭化物が付着している。胎土には砂が混入しているが，焼成は比較的良好である。色調は赤褐色を呈する。

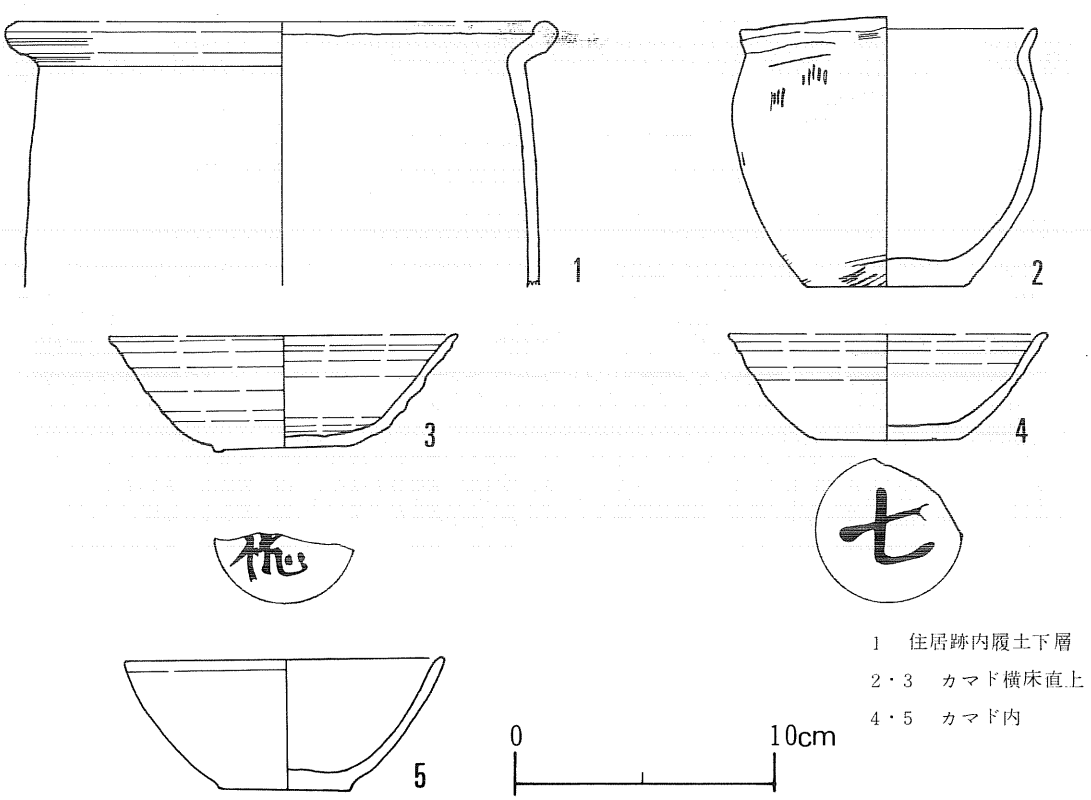
2は，口径11.4cm，器高10.4cm，底径6.2cm，口縁部が一部欠損している。胴部上半に最大径があり，11.8cmを測る。口縁部はわずかに丸味をおびて短く外反し，頸部は「く」の字状を呈し，胴部へと移行する。底部は平底で安定性があり，木葉痕が付されている。器面調整は，口縁部内外面は横ナデを，胴部外面は上半にタテ方向の刷毛目を，下半にヨコ方向の刷毛目を施している。胎土には小石が混入し，焼成は良好でない。色調は黄褐色を呈する。

坏形土器（3～5）　3・4は須恵器，5は土師器である。

3は，口径13.4cm，器高4.4cm，底径5.3cm，底部が三分の一程欠損している。体部下半では丸味をもち，上半では直線的に外傾し，口辺部でやや外に突き出している。底部に回転糸切り痕を残す。色調は暗灰色である。底部に墨書され，「仇※」と判読できる。

※は多賀城研究所平川南氏の鑑定による。

4は，口径12.2cm，器高4.1cm，底径6.0cm，体部が二分の一程欠損している。体部下半ではわずかに丸味をもち，上半では直線的に外傾し，口辺部でやや外に突き出している。底部に回転糸切り痕を残す。色調は灰色である。底部に墨書され，「七」と判読できる。



1　住居跡内履土下層
2・3　カマド横床直上
4・5　カマド内

第11図　第3号住居跡出土遺物

5は，口径12.3cm，器高5.0cm，底径5.0cm，体部は丸味をもって外傾する。底辺部がくびれ，体部との境いは判然としており，底部に回転糸切り痕を残す。かなり器壁は薄く，軽い。内面は二次的火熱のため表面が剝落している。色調は赤変しているところもあるが，黄灰色を呈する。

第4号住居跡

西側は，水田用水路が流れ，調査できなかった。

（遺構の確認）　第3号住居跡拡張の際，A′－12グリッドに落ち込みを検出し，南に2m程拡張した。遺構確認面は，表土下の地山である。

（壁・床面）　確認面では，壁高約30cm，なだらかに地山中の床面に達する。

（周溝）・（柱穴）　検出されなかった。

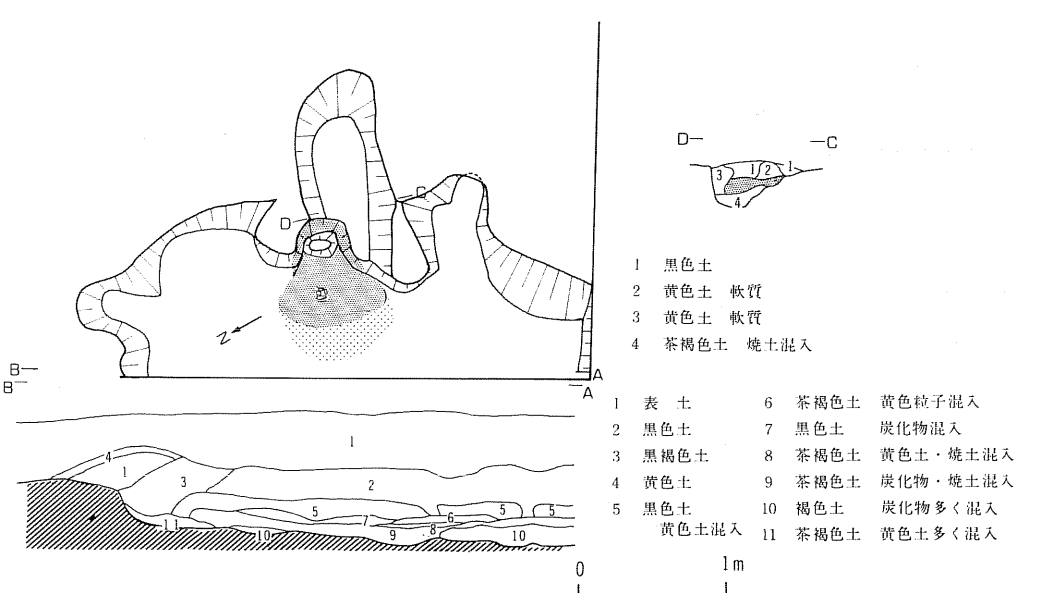
（カマド）　火床が85×80の範囲でひろがり，わずかに壁際に袖部らしいたかまりがみられ，焼土が厚く分布していたが，規模・構造は判然としない。煙道部が地山を掘り込んで，住居外に1m程のびている。

〈第4号住居跡出土遺物〉　（第14図）・（図版13）

出土遺物は，カマド付近より多量に出土した。甕形土器の破片が多く，須恵器坏形土器破片など含まれる。実測できたのは次の1点だけである。

甕形土器（1）

1は，口径24.6cm，現高6.5cm，口縁部が四分の一程残る。口縁部が強く外反し，口辺部が内傾し，外面に稜をもつ。胎土に砂を混入しており，色調は褐色を呈する。



第12図　第4号住居跡

第５号住居跡

（遺構の確認）　本住居跡は，調査区の南側Ａ－14グリッドにプランを確認した。遺構確認面は，表土下の地山である。

（平面形・方向）　平面形は，コーナー部がかなり丸味をもつ隅丸正方形である。長軸・短軸ともに３ｍ15cm，方向は北東を向く。

（壁・床面）　壁高は，東，西，南壁で約20cm，なだらかに落ち込み，地山中の床面に達する。北壁部は，５cm程の落ち込みである。床面は，中央部の一部が平担であるが，他は凹凸がはげしい。

（周溝）　検出されなかった。

（柱穴）　住居跡およびその周辺には，ピットが10個あり，配置からP_1，P_3，P_4，P_5が主柱穴と考えられる。床面からの深さは，P_1が26cm，P_3が29cm，P_4が26cm，P_5が22cmであるが，いずれも，掘り込みがなだらかに落ち込むものである。P_7とP_{10}は，北壁・南壁のほぼ中央に位置し，相対している。深さは，P_7が床面より28cm，P_{10}が地山より46cmである。

（カマド）　北コーナー部のやや東寄りP_5上面付近には，火床面とわずかな焼土のたかまりと住居外に約１ｍ40cmのびる地山を浅く掘り込んだ部分がある。掘り込みの幅は，40cm程で，先端部がふくらむ。又，これより55cm東寄り北壁の中央にも地山を掘り込み，住居外にのびる部分がある。いずれも周辺に焼土が分布することからカマドの煙道部と考えられる。

（その他）　P_2には，焼土および灰色土が充塡しており，床面からは深さ15cmである。西壁北寄りには，第６号住居跡の壁まで浅い溝が走る。

第６号住居跡

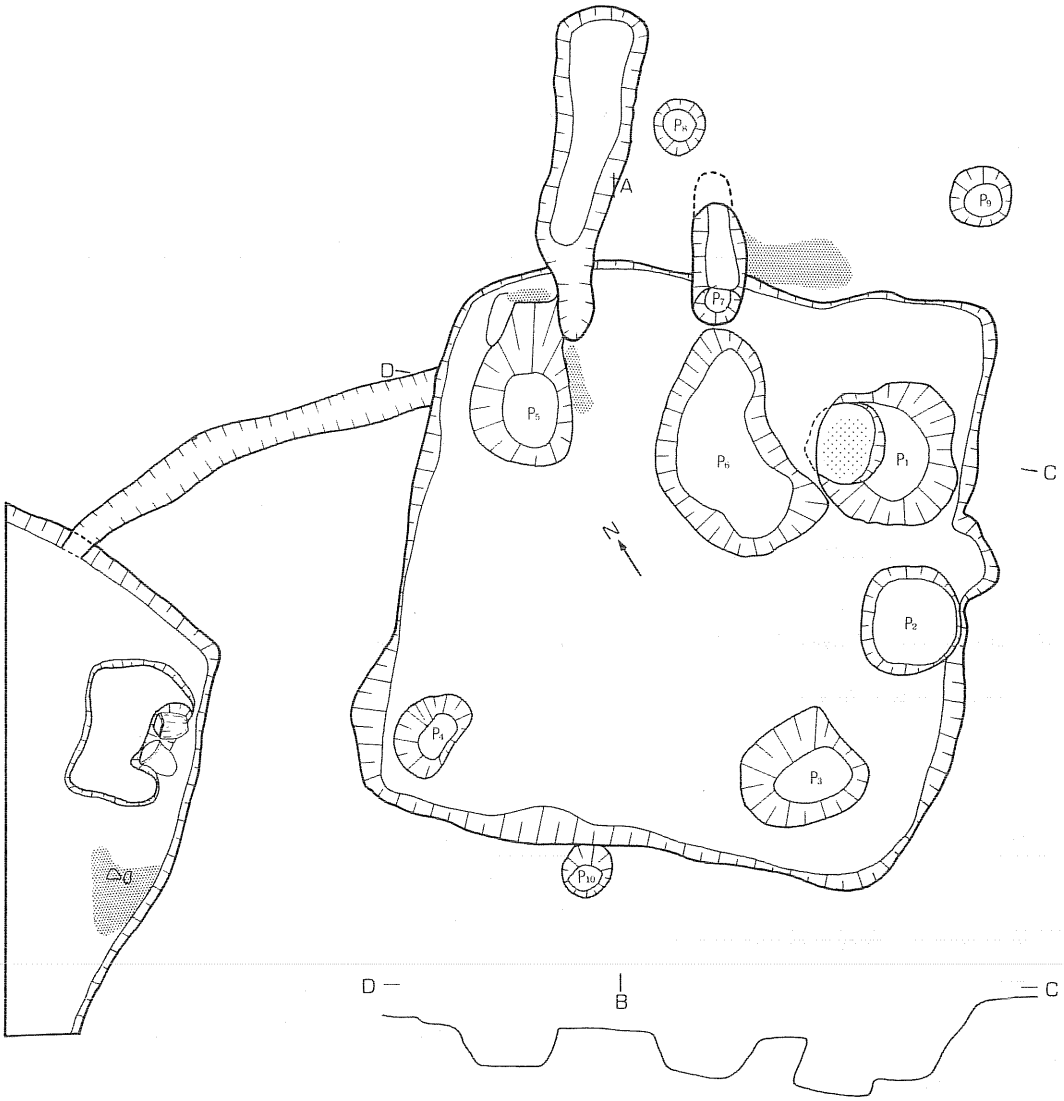
調査区域内では，北東コーナー部を検出したにとどまった。

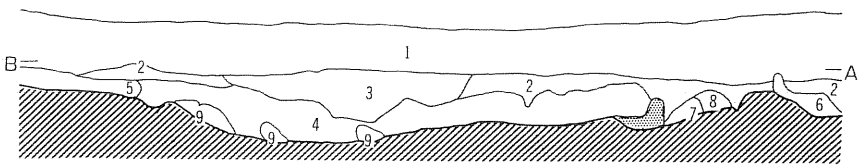
（遺構の確認）　本住居跡は，第５号住居跡の西側Ａ′－14グリッドに北東コーナー部を検出した。

（壁・床面）　壁高５cm程であり，床面は，かたく平担である。

（柱穴）・（周溝）　検出されなかった。

（カマド）　コーナー部近くに暗褐色土に白色粘土が混入したたかまりがあり，口縁部を上にして，甕形土器が２個体横たわっていた。規模・構造が判然としないが，積み土よりおよそカマドと考えられた。それより南には，焼土が分布している。





1　表　土
2　黒色土　軟質
3　暗褐色土　軟質
4　暗褐色土
　　焼土・黄色粒子混入
5　褐色土
6　黒色土　かなり軟質　黄色粒子混入
7　黄色土　焼土ブロック混入
8　暗褐色土　軟質　黄色土混入
9　黄色土ブロック

0　1m

第13図　第5号(右)・第6号(左)住居跡

〈第５号住居跡出土遺物〉　（第14図）・（図版13）

出土遺物は，土師器の甕形土器と須恵器の坏形土器が出土している。

甕形土器（１）

１は，口径18.6cm，現高7.2cm，口縁部が六分の一程残る。口縁部が強く外反し，口辺部が直立し，外面に稜をもつ。器面内外面には，ロクロ使用の痕跡がみられる。色調は白桃色を呈する。

坏形土器（２～３）　２は土師器，３は須恵器である。

２は，口径13.0cm，器高5.3cm，底径6.0cm，体部下半はわずかに丸味をもって外傾するが，上半ではほぼまっすぐ外傾している。底部は平底でわずかに上底ぎみであるが，体部との境は判然としており，ロクロ回転糸切り痕を残す。体部外面にカマ印が付されている。色調は褐色を呈する。

３は，口径13.6cm，器高4.1cm，底径5.6cm，体部は丸味をもって外傾している。底部は平底で，体部との境いは判然としており，ロクロ回転糸切り痕を残す。器面は比較的なめらかであり，色調は灰色を呈する。

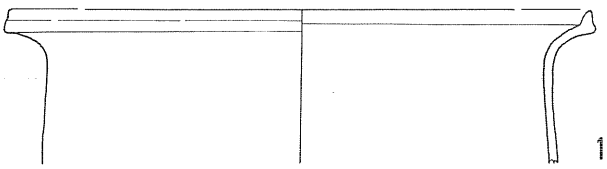
〈第６号住居跡出土遺物〉　（第14図）・（図版14）

出土遺物は，甕形土器２点である。

甕形土器（１～２）

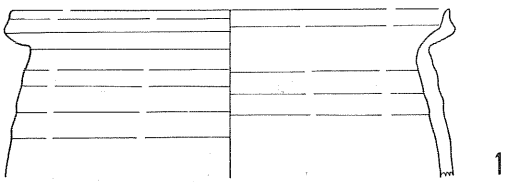
１は，口径15.7cm，器高17.4cm，底径5.4cm，口縁部に最大径がある。口縁部は外反し，頸部にわずかな段をもつ。口辺部はわずかに張り出し，そぎとったように角ばっており，中に軽く沈線が入る。胴部は長胴形を呈している。底部は平底で，安定性がある。器面調整は，口縁部外面は横ナデが，体部外面にはタテ方向のヘラミガキが施されている。口縁部外面に炭化物が付着しており，体部下半から底部にかけて内外面ともに二次的な火熱のため表面が剥落している。色調は暗褐色を呈する。

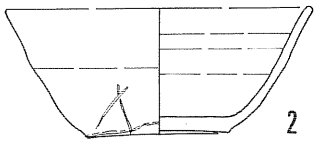
２は，現高18.5cm，底径6.8cm，口縁部が欠損している。胴部は中位にふくらみをもち，なだらかな卵形を呈する。底辺部が突き出し，平底で安定性がある。器面調整は，胴部上半内面はヨコ方向の刷毛目が，下半は内外面ともに，部分的にヨコ方向の刷毛目痕が残るが，タテ方向のヘラミガキが施されている。外面に炭化物が付着し，底部および胴部内面は二次的な火熱のため表面が剥落している。焼成は良好であり，色調は黄褐色を呈する。

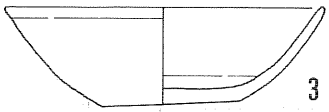


1　住居跡内履土下層

— 第 4 号住居跡出土遺物 —



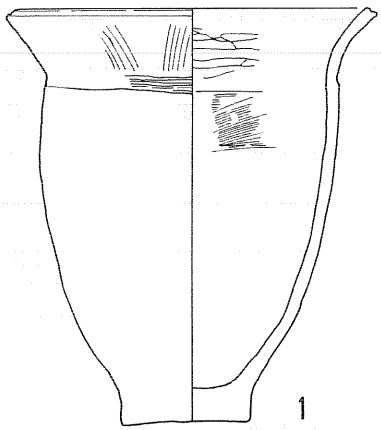


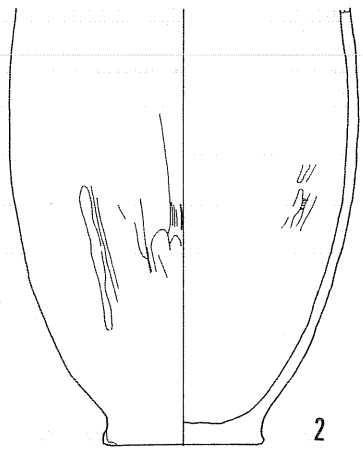


1　ピットP_6内

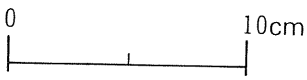
2・3　住居跡内履土下層

— 第 5 号住居跡出土遺物 —





— 第 6 号住居跡出土遺物 —



1　カマド内 南

2　カマド内 北

第14図　第 4・5・6 号住居跡出土遺物

第７号住居跡

北東コーナー部より２ｍ30cmのところに北壁を横切る幅70cm，深さ25cm程の溝が走る。養鯉場の配管設備のため削平されたものとのことである。

（遺構の確認）　本住居跡は，調査区域内で最も南端に位置し，Ａ－16グリッド南半に北東コーナー部の切り込み面を確認し，Ｂ－16さらにＡ－17，Ａ′－17に当たる部分を南に４ｍ，西に４ｍ拡張した。遺構確認面は，表土下の地山である。

（平面形・方向）　北壁の一辺と北東コーナー部を確認し得た。一辺は６ｍ40cm程である。方向は北方向を向く。

（壁・床面）　壁は，北壁と東壁の一部で，壁高は30cm程であり，ほぼ垂直に地山中の床面に達する。床面は，平担である。

（周溝）　カマド西側の一部を残し，壁に沿ってめぐる。幅は20cm程，深さは約10cmで床面からなだらかに落ち込む。カマドの下にも溝が走り，周溝は古いカマドの時期に掘り込まれたものであろう。

（柱穴）　検出されなかった。

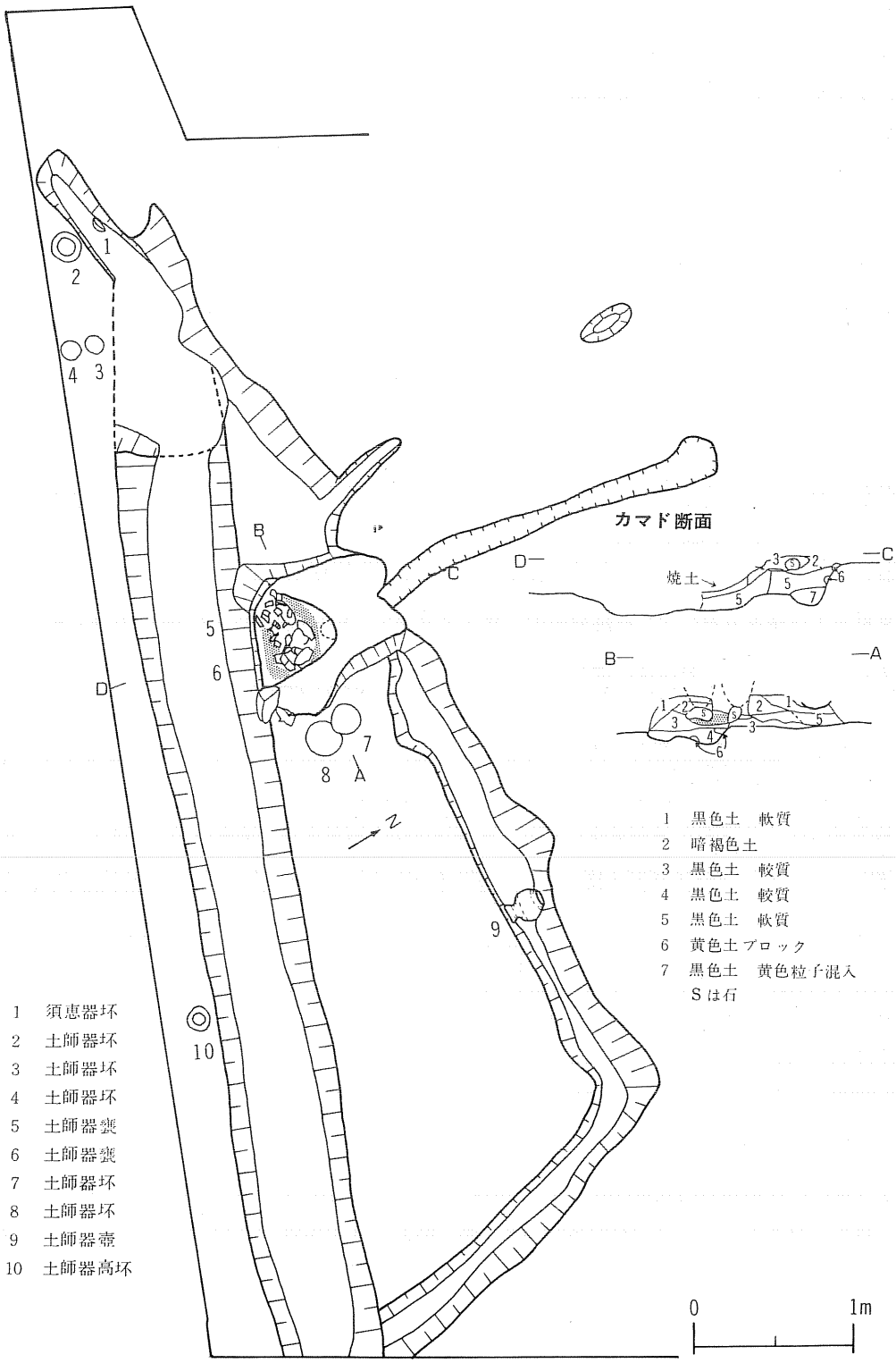
（カマド）　北壁の中央部に位置しており，二本の煙道部の存在により２度構築されたものと考えられる。旧いカマドの煙道部が新しいカマドの西寄りに残り，地山をトンネル状に掘り抜き，住居外に１ｍ75cmのび，35×15cmのだ円形の煙出し口につながっている。煙道断面はドーム形を呈している。新しいほうのカマドは，住居内に焚口部と燃焼部を，住居外に掘り込みの煙道部を構築している。焚口部は溝により壊され，天井部も削平されており，遺存する袖幅は燃焼部で最大幅97cm，煙出し口に向ってすぼまり，73cmである。袖部は暗褐色土と黒色土が積み上げられており，高さは20cm程が残る。右袖に河原石を２個入れ，補強している。燃焼部は幅が50cm，甕形土器を２個すえ，その下には支脚に代用した偏平な丸石が２個置かれていた。煙道部は壁から地山を浅く掘り込んでいる。長さ２ｍ28cm，幅10～16cm，先端部は幅28cmである。使用状況は，燃焼部底面がかなり堅く焼けている。段面でみると焼土の下には黒色土を積んであり，燃焼部を床面より高くして，煙道部との高低差を修整して使用したらしい。

〈第７号住居跡出土遺物〉　（第16・17図）・（図版14・15）

出土遺物は，甕形土器，壺形土器，高坏形土器，坏形土器であり，坏形土器には須恵器が１点ふくまれている。

甕形土器（１～３）

１は，口径23.0cm，器高32.2cm，底径7.0cm，最大径が口縁部にある。口縁部は外反し，頸部に小さな段をもつ。口辺部はそぎ取ったように角ばっている。胴部は長胴形を呈し，底辺ですぼまる。底部は平底であるが，不安定である。器面調整は，口縁部外面には横ナデが，胴部外


カマド断面
焼土
1 黒色土 軟質
2 暗褐色土
3 黒色土 較質
4 黒色土 較質
5 黒色土 軟質
6 黄色土ブロック
7 黒色土 黄色粒子混入
Sは石
1 須恵器坏
2 土師器坏
3 土師器坏
4 土師器坏
5 土師器甕
6 土師器甕
7 土師器坏
8 土師器坏
9 土師器壺
10 土師器高坏
0
1m

第15図 第7号住居跡

面にはわずかにタテ方向の刷毛目痕が残るが，タテ方向のヘラミガキが施され，内面も胴部上半にヨコ方向の刷毛目痕が残るが，タテ方向のヘラミガキが施されている。口縁部内外面には炭化物が付着している。内面胴部下半から底面は二次的な火熱のため表面が剥落している。胎土には小石が混入しているが，焼成は比較的良好である。色調は褐色を呈する。

2は，口径20.4cm，器高（31.1cm），底径7.0cm，口縁部に最大径がある。口縁部は外反し，頸部はわずかに段をもつ。口辺部は丸味をもつ。胴部は長胴形を呈している。底部は平底であるが，凹凸があり，不安定である。器面調整は，外面は口縁部にタテ方向の刷毛目痕が残るが，横ナデを，胴部にタテ方向の刷毛目を施し，頸部を画している。内面は胴部上半にヨコ方向の刷毛目が施されている。口縁部に炭化物が付着し，胴部内外面は二次的な火熱のため表面が剥落している。胎土には小石が混入し，焼成は良好でない。色調は褐色を呈する。

3は，口径17.1cm，現高13.0cm，口縁部から胴部にかけて四分の一程残る。口縁部は短く外反し，頸部で「く」の字状にくびれて，胴部へゆるやかに移行する。口辺部は張り出している。器面調整は，外面は口縁部に横ナデを，胴部にタテ方向の刷毛目を施し，頸部を画している。胴部外面では一部にヘラミガキも施されている。内面ではタテ方向のヘラミガキがヨコ方向の刷毛目の上に施されている。口縁部内面は横ナデである。胴部外面には炭化物が付着している。焼成は良好であり，色調は白褐色を呈する。

壺形土器(4)

4は，口径10.2cm，器高16.6cm，底径7.3cm，最大径は胴部上位にある。胴部はほぼ球形を呈しており，上半と下半がややはっている。口縁部は胴部より「く」の字状に立ちあがり，わずかに外反するが，口縁部上半で丸味をもつ。底部は安定した平底で，木葉痕が付されている。器面調整は，外面は口縁部および胴部上半から下半にかけてタテ方向のヘラミガキが施され，胴部下半底辺近くではヨコ方向のあらいヘラミガキで底辺部を削りとっている。内面は口縁部から体部下半までヨコ方向に長いヘラミガキが施されている。胴部に刷毛目がわずかにみられる。胎土に小石が混入しているが，焼成は比較的良好であり，色調は口縁部は黒色であるが，黄褐色を呈する。

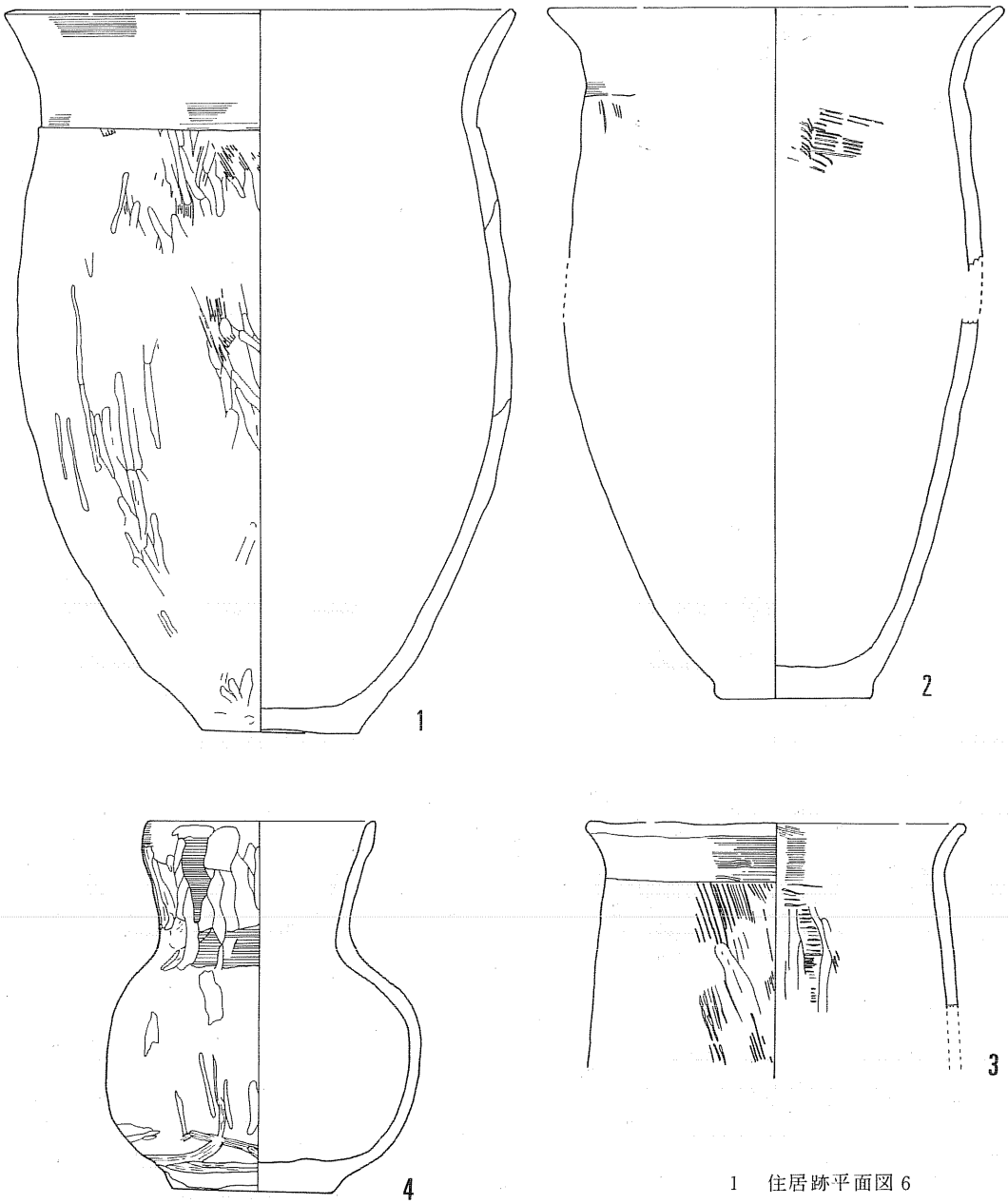
坏形土器（5～10）　10は須恵器である。

土師器の坏形土器は，5・6・7・8・9いずれも丸底で，内面は黒色処理されている。

5は，口径20.2cm，器高6.2cm，外面体部下半に段をもち，口縁部は内弯する。器面調整は，口縁部内外面ともにヨコ方向のヘラミガキが，内面では，外面の段に対してわずかに器壁が薄くなる部分より下は，底面の中心に向けて放射状のヘラミガキが施され，外面体部下半にもヘラミガキが施されている。焼成は良好であり，色調は黄灰色を呈する。

6は，口径18.2cm，器高5.0cm，形状・調整は5と変らない。

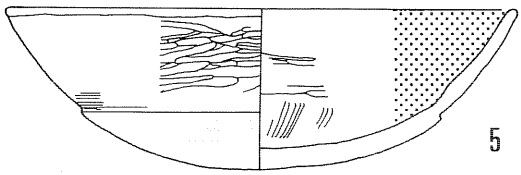
7は，口径19.5cm，器高4.8cm，形状・調整は5・6と変らない。

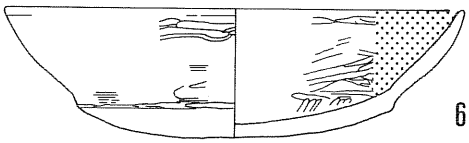


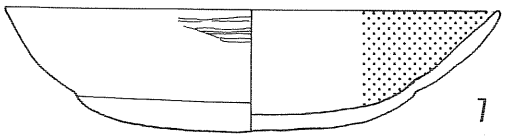
1　住居跡平面図 6
2　住居跡平面図 5
3　住居跡内履土上層
4　住居跡平面図 9

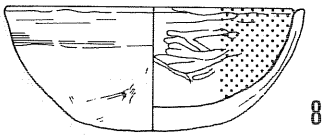
0　10cm

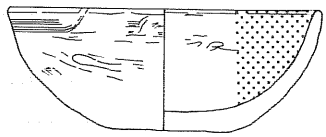
第16図　第 7 号住居跡出土遺物 (1)

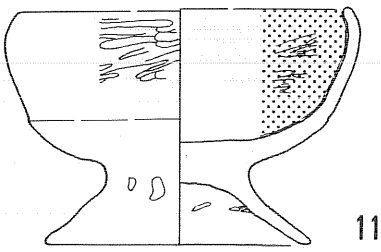


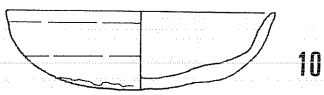




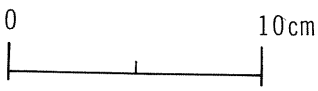








5　住居跡平面図 8
6　住居跡平面図 7
7　住居跡平面図 2
8　住居跡平面図 3
9　住居跡平面図 4
10　住居跡平面図 1
11　住居跡平面図10



第17図　第７号住居跡出土遺物 (2)

8・9は，平底に近い丸底であり，体部は丸味をもって外傾し，段をもたず，椀形を呈する。

8は，口径11.8cm，器高4.9cm，器面調整は，口縁部内外面にヨコ方向の刷毛目痕を残し，ヨコ方向のヘラミガキを，体部内外面にはこまかいヘラミガキを施している。胎土に小石が混入し，焼成は良好であり，色調は褐色を呈する。

9は，口径12.4cm，器高4.9cm，底部は平底ぎみで，かなり安定性がある。器面調整は，口縁部内外面にはヨコ方向の刷毛目痕を残し，ヨコ方向のヘラミガキを，体部内外面にはヨコおよびナナメ方向のこまかいヘラミガキを施している。胎土に小石が混入し，焼成は良好であり，色調は褐色を呈する。

10は，口径10.6cm，器高3.1cm，半分程欠損している。須恵器の坏形土器である。丸底であり，体部もかなり丸味をもつ。体部内外面にはロクロ痕がみられ，底部は，ヘラ切りにより切り離されており，切り離し部分と体部との境いは粘土が残り，判然としている。色調は灰色を呈する。

高坏形土器（11）

11は，口径13.2cm，器高9.2cm，脚部裾径10.5cm，口縁部が一部欠損している。内面は黒色処理されている。坏部は椀に近い形状を呈し，坏体部下半にわずかながら段をもつ。口縁部は内弯し，坏体部上半に最大径14.0cmを測る。脚部は「ハ」の字状を呈している。器面調整は，坏体部上半は内外面ともにヨコ方向のヘラミガキが，坏部底面は外面の段に対してややくぼみ，そこから中心に向けて放射状のヘラミガキが施されている。外面は坏部下半から脚部との接合部にかけて，タテ方向のヘラミガキが施されている。脚部は内面にヨコ方向のヘラミガキを，裾部は横ナデが施されている。胎土は緻密で，焼成は良好である。色調は黄灰色を呈する。

第8号住居跡

（遺構の確認）　本住居跡は調査区域の中央部B－7グリッドに北西コーナー部を検出し，B－6，C－6，C－7グリッドで平面プランを確認した。遺構確認面は表土下の地山である。

（平面形・方向）　平面形は，東西の胴が張り，コーナー部がわずかに丸味をもつ隅丸長方形である。長軸5m38cm，短軸4m55cm，長軸は東西方向を向く。

（壁・床面）　南側に向って削平され，南東コーナー部は確認できなかった。北側は壁高は20cm，ほぼ垂直に落ち込み，地山中の床面に達する。床面は，平担であり，全体に堅緻である。

（周溝）　検出されなかった。

（柱穴）　ピットは4個あり，主柱穴と考えられる。床面からの深さは，P_1は34cm，P_2は47cm P_3は54cm，P_4は50cmである。柱穴間は，間隔が東西2m30cm，南北2m40cmでほぼ正方形に配置されている。

（カマド）　北壁の中央部に構築されている。北壁まで長さ85cm幅90cmの焼土のたかまり部分

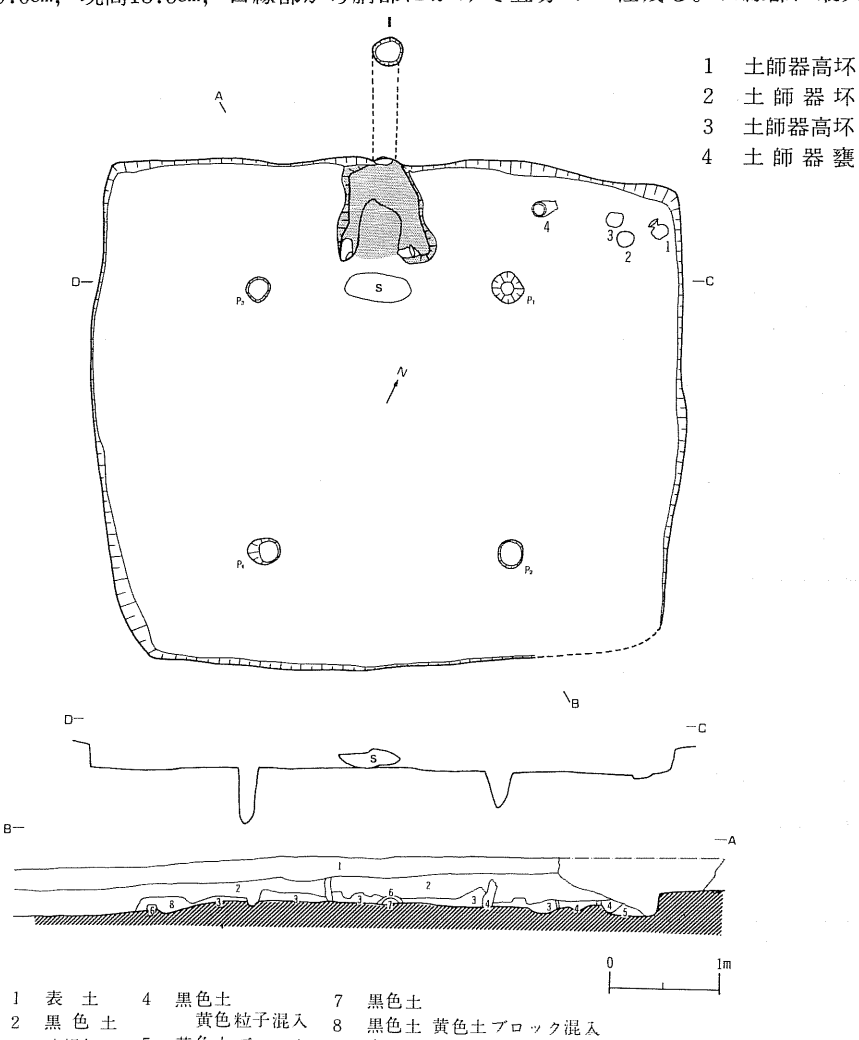
と住居外にのびる地山を掘り抜いた煙道部，煙出し口からなる。天井部がなくなっているが，両袖幅は焚口付近で90cm，奥に行くにしたがってすぼまり60cm，両袖に石をたて補強している。焚口部は40cmほどで，燃焼部もほぼ同じ巾で，焚口部からゆるやかにのぼりの傾斜をとり，煙道部に通じる。煙道部は地山を長さ90cmのトンネル状に掘り抜き，28cm×25cm円形の煙出し口に通じている。焚口部から燃焼部にかけては，床面が焼けている。焚口部の前に長さ60cm幅25cmの大きな石がすえてあった。

〈第８号住居跡出土遺物〉　（第19図）・（図版16）

出土遺物は，甕形土器，甑形土器，坏形土器，高坏形土器である。

甕形土器（１～２）

１は，口径19.0cm，現高13.5cm，口縁部から胴部にかけて五分の一程残る。口縁部に最大



第18図　第８号住居跡

径をもつようである。口縁部は外反し，頸部に段をもつ。口辺部は張り出している。器面調整は，口縁部外面は横ナデが施され，部分的には，刷毛目，ヨコ方向のヘラミガキが残る。内面はヨコ方向のヘラミガキが施されている。胴部外面は，タテ方向の刷毛目のあとで，タテ方向のヘラミガキが施され，胴部内面は，ヨコ方向の刷毛目が施されている。又，輪積痕が数条めぐる。胎土には砂が混入し，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。

2は，現高15.0cm，底径7.2cm，胴部上半と口縁部が欠損している。底部は底辺が突き出し，安定性がある。器面調整は，外面にタテ方向の刷毛目が，内面はヨコおよびナナメ方向の刷毛目が施されている。内面は二次的な火熱のため表面が剝落している。色調は暗褐色を呈する。

甑形土器（3）

3は，現高15.3cm，孔径8.8cm，胴部下半が残る。長胴甕形土器の底を欠いた形である。孔辺より高さ0.8cmから2cmの間に対になるように直径9mmの小孔を二個穿っている。孔辺を平らにさらに内側を鈍角に削っている。器面調整は，外面にタテ方向の刷毛目が，内面は上半にヨコ方向の刷毛目が，下半はヘラミガキが施されている。色調は黄褐色を呈する。

坏形土器（4）

4は，口径18.0cm，器高4.5cm，口縁部が内弯し，体部下半に段をもつ丸底坏である。器面調整は，口縁部内外面はヨコ方向のヘラミガキが，内面は外面の段に対して器壁のうすくなる部分から放射状のヘラミガキが施され，黒色処理されている。口縁部中央および底部外面にはあらい刷毛目痕が残っている。焼成は良好であり，外面の色調は黄灰色を呈する。

高坏形土器（5～6）

5は，口径12.8cm，器高10.9cm，脚部裾径10.5cm，坏口縁部が半分程欠損している。坏部は口縁部が内弯する椀形を呈し，上半に最大径14.1cmを測る。脚部は「ハ」の字状にひろがり，裾部は突き出し，安定性がある。器面調整は，坏口縁部は内外面ともにヨコ方向のヘラミガキが，坏内面上半から底面にかけては円を描くように長いヘラミガキが施され，黒色処理されている。坏外面下半から脚部との接合部にかけてタテ方向のヘラミガキが施されており，脚部外面も同様である。胎土には小石が混入しているが，焼成は良好である。外面の色調は褐色を呈する。

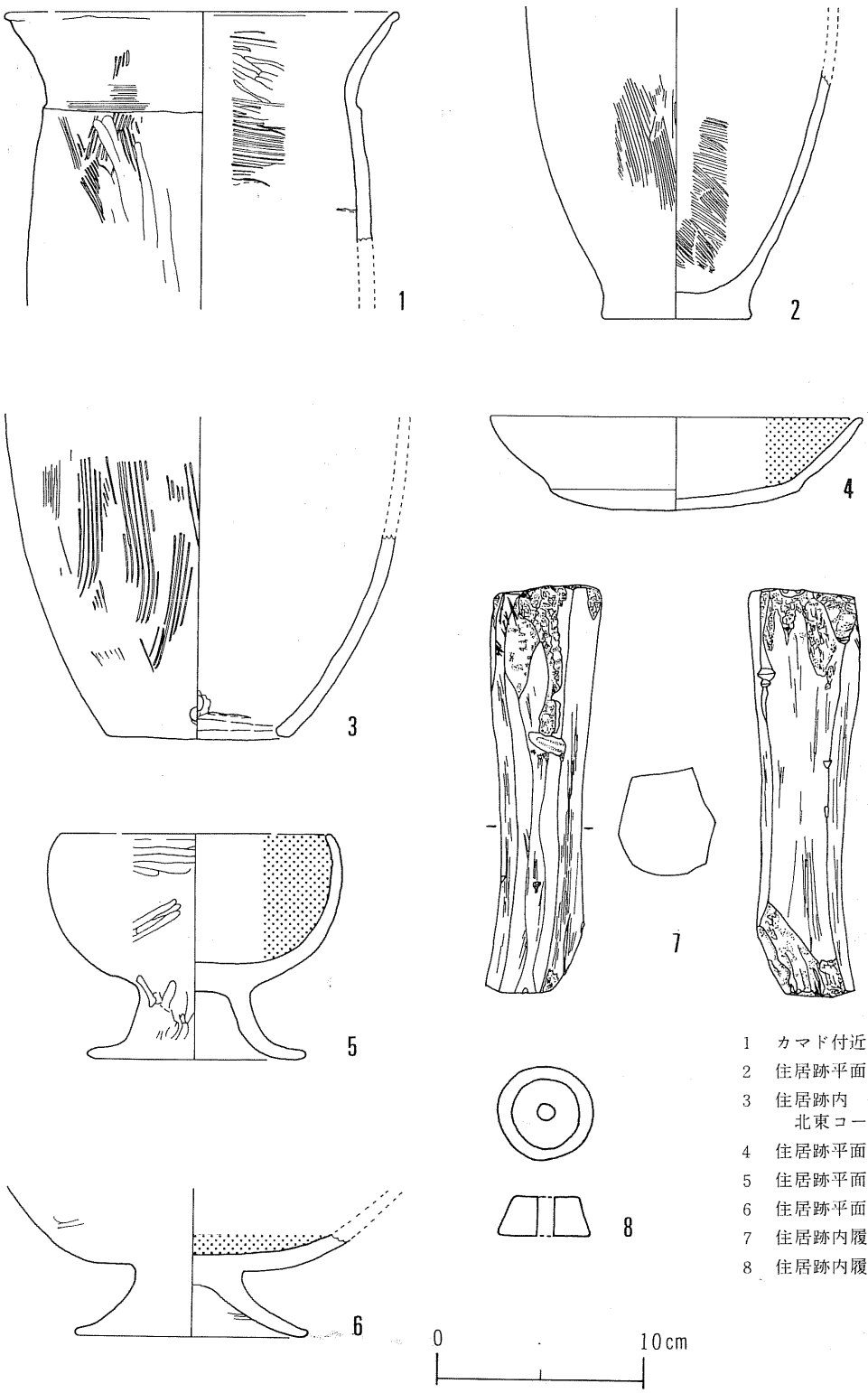
6は，現高7.1cm，脚部裾径11.2cm，坏部上半が欠損している。坏部は丸味をもって外傾し，皿状を呈する。脚部は「ハ」の字状を呈する。器面調整は，坏部外面はヨコ方向のヘラミガキが施され，内面は摩滅して調整は判然としないが，黒色処理されている。脚部内面はヨコ方向のヘラミガキが施されている。焼成は良好であり，外面の色調は黄褐色を呈する。

砥石（7）

7は，長さ19.6cm，幅4.7cm，断面は多面体で，4面が使用されている。石材は凝灰石である。

紡錘車（8）

8は，直径4.5cm，厚さ1.9cm，孔径9mmであり，外面にうるしが付着し，光沢がある。



1　カマド付近
2　住居跡平面図４
3　住居跡内
　　北東コーナー部付近
4　住居跡平面図２
5　住居跡平面図１
6　住居跡平面図３
7　住居跡内履土上層
8　住居跡内履土下層

第19図　第８号住居跡出土遺物

Ⅵ　その他の出土遺物

（第20・第21図）（図版17）

石器　9点出土している。これらの石器は，グリッドの表土，つまり耕作土中より出土している。

トランシェ様石器（1）　**1**は長さ7cm，撥形を呈しており，刃部に最大幅3.9cmを測る。第一次加工でできた縁辺をそのまま刃としており，第二次加工により他の縁辺を加工し，形をつくっている。石材は頁岩である。

石箆状石器（2～5）　**2**は，長さ10.6cm，最大幅5.1cm，縦長の石刃状剥片の周辺に片面から剥離を加え，断面は蒲鉾形を呈す。頁岩。**3**は，現存する長さ7.5cm，幅は6.5cm，比較的大形のもので長方形を呈するものである。側縁を両面から剥離を加えている。比較的薄手で，中央部分に稜が通る。石材は頁岩である。**4**は，長さ7.5cm，最大幅4.3cm，側縁を両面から剥離を加えている。薄手で，断面は凸レンズ状を呈する。石材は頁岩である。**5**は，長さ11.9cm，最大幅5.1cm，縦長の石刃状剥片の周辺に両面から剥離を加えており，一部は片面だけから剥離を加えている。厚手で，断面は凸レンズ状を呈する。石材は頁岩である。

砥石（6）　現存する長さは4.9cm，幅は6.0cm，厚さは2.5cmである。表面はわずかにくぼみ多方面に擦痕がみられる。石材は凝灰岩質シルト岩である。

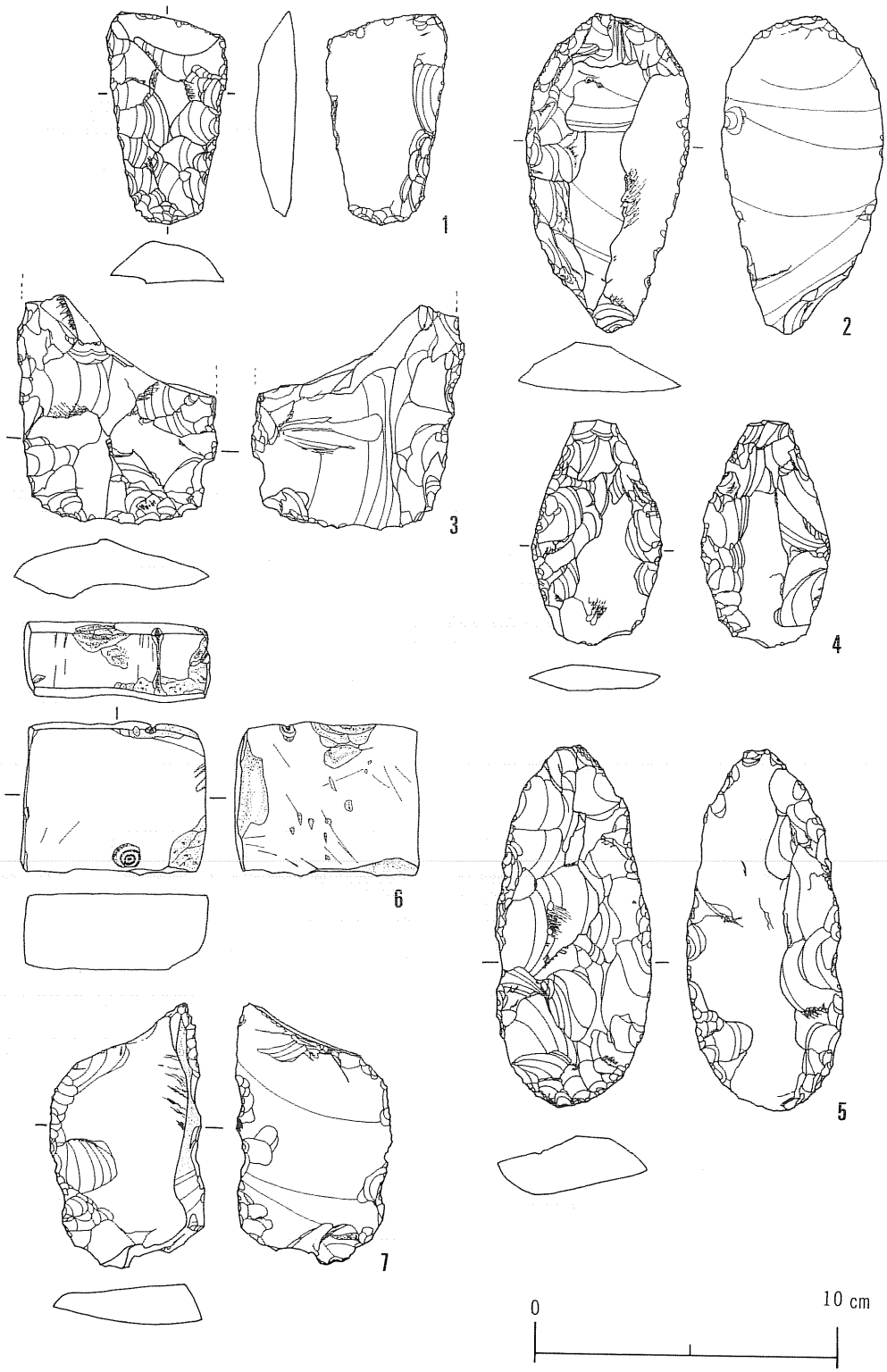
不定形剥片石器（7～9）　**7**は長さ8.3cm，最大幅5.0cm，一方の側縁を両面から剥離を加えている。石材は頁岩。**8**は長さ8.1cm，最大幅4.8cm，断面は薄手で凹レンズ状を呈す。頁岩**9**は，長さ8.5cm，最大幅2.8cm，剥片の側縁の一方に片面から剥離を加え，断面は厚い。頁岩。

土器　調査後，整地作業中に調査区域北辺，B－3グリッド付近に落ち込みがあり，その周辺より土器が一括して出土した。次の4点が復元できた。

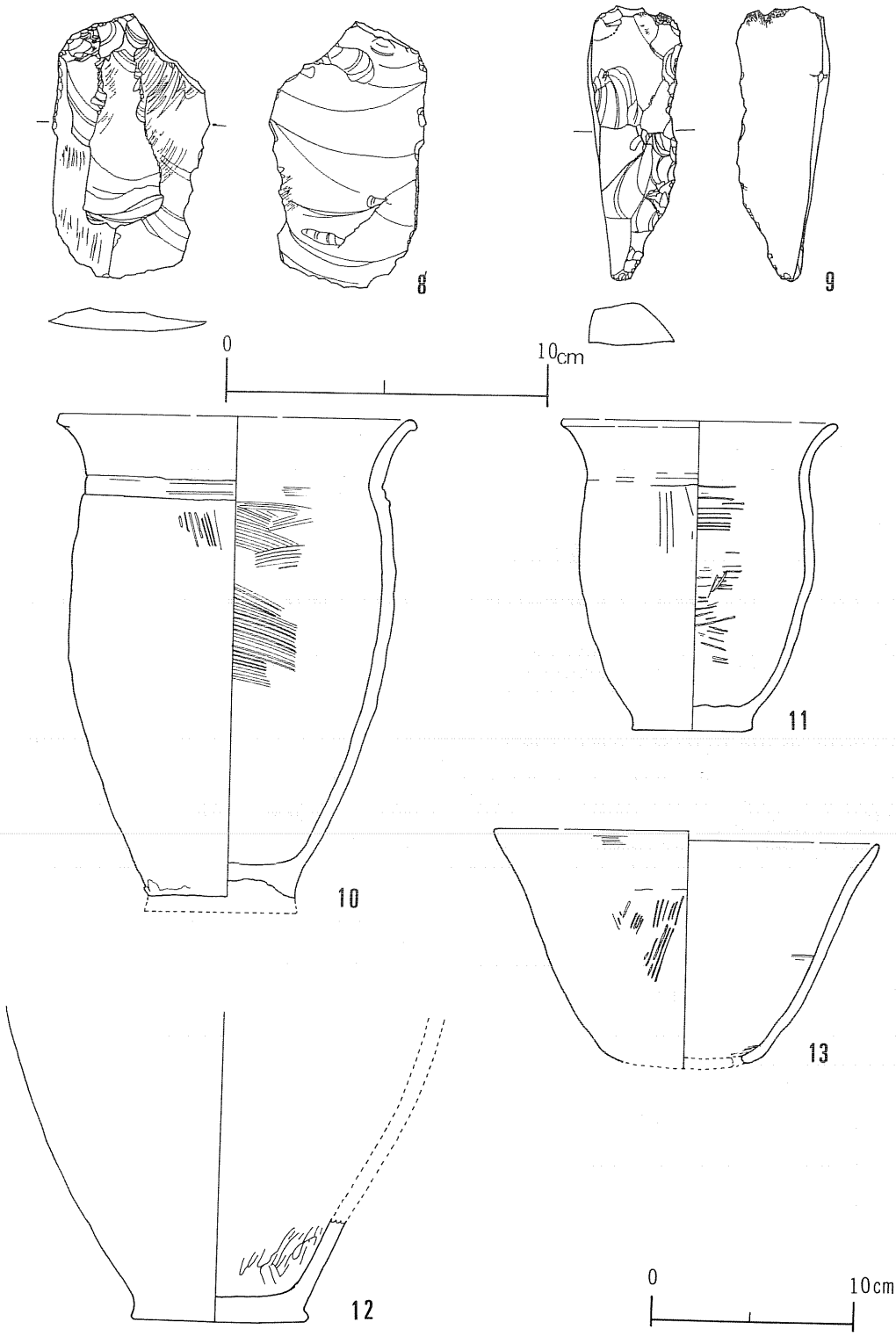
甕形土器（10～12）

10は，口径18.0cm，現高24.0cm，底径約7.5cm，口縁部に最大径がある。口縁部は外反し，頸部に小さな段をもち，さらに上面に稜をもつ。口辺部は張り出し，胴部は長胴形を呈する。器面調整は，口縁部から段の部分までは横ナデが，胴部上半は外面にタテ方向の刷毛目が，内面はヨコ方向の刷毛目が施されている。色調は灰褐色を呈する。**11**は，口径13.8cm，器高15.5cm，口縁部から胴部にかけて半分程欠損している。口縁部は外反し，頸部でくびれて，なだらかに胴部へ移行する。口辺部は張り出し，胴部は長胴形を呈する。底部は底辺が突き出し，平底で安定性がある。器面調整は，口縁部外面は横ナデが，胴部外面はタテ方向の刷毛目が，内面はヨコ方向の刷毛目が施されている。色調は黄褐色を呈する。**12**は，現高15.5cm，底径9.0cm，胴部下半から底部にかけて残る。底部は底辺が突き出し，平底で安定性がある。器面調整は，胴部下半内面はヘラミガキが施されている。色調は，暗褐色を呈する。

甑形土器（13）　口径19.2cm，現高11.3cm，底部から口縁部まで三分の一程残る。鉢形を呈し，口縁部はわずかに外反する。底辺に小孔が3個ほど穿っていた段面がみえる。多孔式の甑である。器面調整は，口縁部外面には横ナデが，胴部外面にはタテ方向の刷毛目が施されている。胎土には小石が混入し，焼成は良好でない。色調は黄灰色を呈する。



第20図　その他の出土遺物 (1)



第21図　その他の出土遺物 (2)

V　ま　と　め

今回の発掘調査で検出し得た遺構は，いずれも竪穴住居跡で，その数は８軒である。これらを出土遺物・規模・形状・内部施設から検討した結果三つのグループにわけられる。このグループ差はそのまま時間差と考えられる。したがって，この遺跡は大きく三期にわけられる。

第Ⅰ期

竪穴住居跡でいえば第１，第７，第８号住居跡がこれにあたる。住居跡の規模は，第８号住居跡が一辺５ｍ台，第７号住居跡は一辺６ｍ台，第１号住居跡は9.2ｍ×8.4ｍを測り，かなり規模が大きい。このように規模の上では大小があるが，大形のものが多い。形状は，コーナー部がわずかに丸味をもつ程度の隅丸正方形ないし長方形を呈している。内部施設は，カマドが北側の壁の中央部に位置しており，煙道は，地山をトンネル状に掘り抜いて住居外に通じるものであり，両袖部には河原石を使い，補強している。柱穴は，第７号住居跡は完掘していないので不明だが，第１号，第８号住居跡では４本の主柱穴が等間隔に整然と配置されている。第１号，第７号住居跡では壁に沿って周溝がめぐる。

出土遺物は，三軒の住居跡から体部下半に段をもつ内黒の丸底坏が出土しており，それにともなって，甕形土器，壺形土器，甑形土器，高坏形土器が出土し，形状，器面調整においてそれぞれ共通した特徴をもつ。これを下藤根Ⅰ期と呼ぶこととする。

この時期の遺物は県内においては，平鹿町中藤根遺跡(註１)，五城目町岩野山古墳群(註２)，西目町沼田遺跡などで出土しており，県外では，宮城県砂押川・糠塚遺跡の丸底坏と形状が類似し，国分寺下層式に比定される(註３)。国分寺下層式については，以下のように分類されている(註４)。

第Ⅰ類　坏腹部外壁に軽い段を形成し，これに対応する器内壁に特に識別できるような変化をもたないもの

第Ⅱ類　第Ⅰ類にみられた段が底部近くに移行したとみられるもの

第Ⅲ類　内反気味の口縁からそのまま底部に接続するもの

第１，第７，第８号住居跡で出土したものは，Ⅱ類にあてはめられ，器面調整は，口縁部内外面はヨコ方向のヘラミガキが，内面下半では段に対して器壁のうすくなる部分から中心に向けて放射状のヘラミガキが施されている。第７号住居跡では，Ⅱ類にあてはめられる土器にともなってⅢ類にあてはめられる土器が出土し，丸底を呈する須恵器が伴出している。

第Ⅱ期

竪穴住居跡では，第２号住居跡がこれにあたり，第Ⅰ期，第Ⅲ期とは，区別できる。住居跡の規模は，5.65ｍ×5.75ｍで比較的大規模なものである。形状は，コーナー部がわずかな丸味をもつ程度の隅丸正方形を呈している。内部施設は，南壁の東寄りにカマドを構築し，カマド西側にピットがあり，炭化物および底部に回転ヘラ切り痕を残す須恵器坏形土器が出土してい

る。柱穴は不整であるが4個考えられる。又，壁に沿って周溝がめぐる。

出土遺物は，カマド内およびカマド横のピット内より，底部に回転ヘラ切り痕を残す須恵器坏形土器が出土している。

昭和48年度の中藤根遺跡の調査において検出されたA地区第2号住居跡は，6.3m×6.8mの規模，方形を呈する形状，南壁東寄りに構築されたカマド，カマド西側に炭化物，焼土を充塡した比較的大きな円形のピット，柱穴の存在，壁に沿ってめぐる周溝など，本遺跡の第2号住居跡ときわめて類似した特徴を有する。又，底部に回転ヘラ切り痕を残す須恵器坏形土器を出土している。こうした竪穴構造，出土遺物より第2号住居跡を第II期とした。

第III期

竪穴住居跡でいえば，第3，第5号住居跡がこれにあたる。住居跡の規模は，第3号住居跡が3.55m×3.25m，第5号住居跡が3.15m×3.15mで，第I期，第II期と比較するときわめて小規模のものである。形状は，コーナー部がかなり丸味もつ隅丸正方形ないし長方形を呈している。内部施設は，カマドが，第3号住居跡では西壁北寄りに，第5号住居跡では北壁西寄りに構築されており，コーナー部に寄った位置にある。ただし，カマドは構造的なちがいがある。つまり第3号住居跡では，煙道部を竪穴内に設けているのに対し，第4号，第5号住居跡では，地山を掘り込んで煙道部としている。柱穴は，第3号住居跡では判然とせず，第5号住居跡の柱穴も掘り込み，配置の整然としたものではない。周溝は，検出されなかった。

出土遺物は，いずれも点数が少なく，底部に回転糸切り痕を残す須恵器，土師器坏形土器とロクロ成形による口縁部が強く外反し，口辺部外側に稜をもつ土師器甕形土器が伴出している。

こうした竪穴構造，出土遺物より下藤根第III期とした。

土師器の坏，甕形土器は宮城県の表杉ノ入式に比定されるものであり，年代は10C前半を中心として9C後半から11C後半までというように考えられている。(註5) 県内では，払田柵において，嘉祥二年（849年）の墨書のある木簡とともに底部に回転糸切り痕を残す須恵器坏形土器が出土しており，底部に回転糸切り痕を残す須恵器坏形土器と伴出する土師器については，従来より古く年代設定されると考えられる。(註6)

以上，下藤根遺跡におけるIII期の区分は奈良時代中頃から平安時代前半までの各時期にあたると考えられる。今後さらに検討することで，県内の型式設定に役立てられるであろう。

註1　秋田県教育委員会　昭和49年3月『中藤根遺跡』

註2　五城目町教育委員会　昭和49年3月『岩野山』C地区1号遺構より出土の土師器

註3　宮城県多賀城跡研究所技師桑原滋郎氏，藤沼邦彦氏の助言によった。

註4　氏家和典　昭和42年——陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって——『山形県の考古と歴史』

註5　氏家和典　昭和32年3月——東北土師器の型式分類とその編年——　『歴史』14号

註6　秋田県払田柵跡調査事務所　第7次現地説明会資料

土師器甕

番号	住居跡名	実測図番号	図版番号	器高 cm	口縁径 cm	底径 cm	器面調整 口縁部 内面	口縁部 外面	胴部上半 内面	胴部上半 外面	胴部下半 内面	胴部下半 外面	底部 内面	底部 外面	備考
1	1号	1	1	30.1	21.5	6.8	横ナデ	横ナデ	ハケ目	ハケ目	ハケ目	ハケ目	—	木葉痕	
2	1号	2	2	30.0	21.1	6.5	横ナデ	横ナデ	ハケ目	ハケ目	ハケ目	ハケ目	ハケ目	木葉痕	
3	1号	3	3	20.0	17.0	5.9	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ハケ目	ヘラミガキ	ハケ目	—	木葉痕	
4	1号	4	4	現14.0	19.3		ハケ目	ハケ目	ハケ目	ハケ目					
5	1号	5	5	16.0	13.5	7.0	—	—	—	—	—	—	—	木葉痕	
6	1号	6	6	現16.5	19.4		—	横ナデ	ハケ目	ハケ目					
7	2号	1	1	現 4.9	16.4		—	—							
8	3号	1	1	現10.2	21.3			ロクロ痕							
9	3号	2	2	10.4	11.4	6.2	横ナデ	横ナデ	—	ハケ目	—	ハケ目	—	木葉痕	
10	4号	1	1	現 6.5	24.6			ロクロ痕							
11	5号	1	1	現 7.2	18.6				ロクロ痕	ロクロ痕					
12	6号	1	1	17.4	15.7	5.4	ヘラミガキ	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ				—	
13	6号	2	2	現18.5		6.8			ハケ目	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	
14	7号	1	1	32.2	23.0	7.0	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	—	—	
15	7号	2	2	(31.1)	20.4	7.0	横ナデ	横ナデ	ハケ目	ハケ目	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—	
16	7号	3	3	現13.0	17.1		横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ハケ目					
17	8号	1	1	現13.5	19.0		ヘラミガキ	横ナデ	ハケ目	ハケ目					
18	8号	2	2	現15.0		7.2			ハケ目	ハケ目	ハケ目	ハケ目	ハケ目	—	

現は現高を示す
ハケ目＝刷毛目
—は調整不明

出土土器表 I

壺・甑

番号	住居跡名	実測図番号	図版番号	器高 cm	口縁径 cm	底径 cm	器面調整 口縁部 内面	口縁部 外面	胴部上半 内面	胴部上半 外面	胴部下半 内面	胴部下半 外面	底部 内面	底部 外面	備考
1	1号	8	8	21.4	13.7	7.3	——	——	ハケ目	ハケ目	ハケ目	ハケ目			
2	1号	9	9	現23.7	21.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ハケ目	ヘラミガキ			
3	7号	4	4	16.6	10.2	7.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	——	木葉痕	
1	1号	7	7	27.6	23.8	孔径 8.8	横ナデ	横ナデ	ハケ目	ハケ目	ハケ目	ヘラナデ			小孔2個
2	8号	3	3	現15.3		孔径 8.8	、		ハケ目	ハケ目	ヘラミガキ	ハケ目			小孔2個

高坏

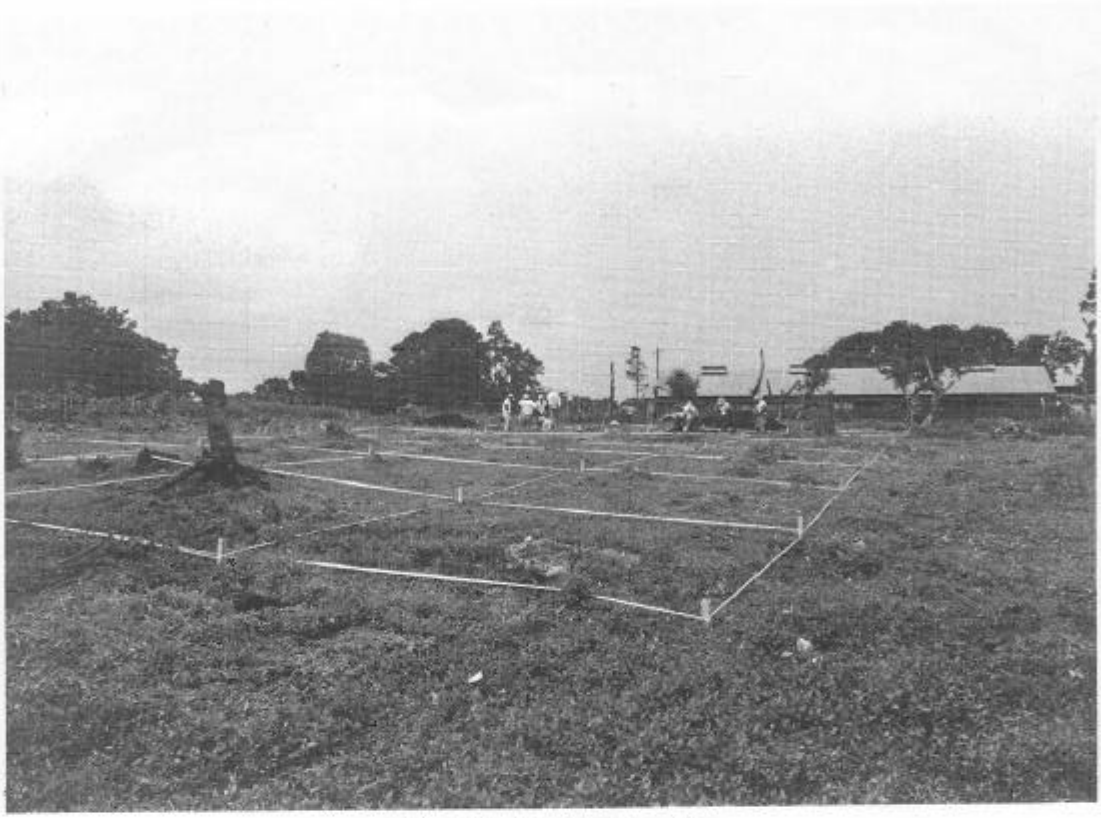
番号	住居跡名	実測図番号	図版番号	器高 cm	杯部 口縁部cm	杯部 高さ cm	脚部 接合部径 cm	脚部 裾径 cm	脚部 高さ cm	器面調整 杯部上半 外面	杯部上半 外面	杯部下半 内面	杯部下半 外面	脚部上半 内面	脚部上半 外面	脚部下半 内面	脚部下半 外面	備考
1	1号	15	15	現11.9	14.8	7.4	6.2	10.2	4.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		——			内黒
2	1号	16	16	現 6.1	20.4	5.5	5.3			ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ						内黒
3	1号	17	17	現 5.1			6.2	11.8	3.4			ヘラミガキ	ヘラミガキ	——	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	内黒
4	1号	18	18	現 5.4	17.6	5.3				ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ					内黒
5	1号	19	19	現 6.3			6.2					ヘラミガキ		横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	横ナデ	内黒
6	1号	20	20				6.3					ヘラミガキ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	
7	1号	21	21	現 4.2			5.3	11.0	3.0			ヘラミガキ	ヘラミガキ	ハケ目	ヘラミガキ	——	ヘラミガキ	内黒
8	7号	11	11	9.2	13.2	6.2	5.6	10.5	3.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	横ナデ	横ナデ	内黒
9	8号	5	5	10.9	12.8	7.3	5.2	10.5	3.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	——	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	内黒
10	8号	6	6	現 7.1	10.3	7.3	5.0	11.2	3.0			——	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		ヘラミガキ	内黒

出土土器表 II

土師器坏

番号	住居跡名	実測図番号	図版番号	器高 cm	口縁径 cm	底径 cm	器面調整 口縁部 内面	口縁部 外面	体部上半 内面	体部上半 外面	体部下半 内面	体部下半 外面	底面 内面	底面 外面	備考
1	1号	11	11	現 4.8	19.0	丸底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ					内黒
2	1号	12	12	現 4.5	(14.0)	丸底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ					内黒
3	3号	5	5	5.0	12.3	5.0	ロクロ痕	ロクロ痕	——	ロクロ痕	ロクロ痕	——	ロクロ痕	回転糸切	
4	5号	2	2	5.3	13.0	6.0	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切	カマ印
5	7号	5	5	6.2	20.2	丸底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			内黒
6	7号	6	6	5.0	18.2	丸底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			内黒
7	7号	7	7	4.8	19.5	丸底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			内黒
8	7号	8	8	4.9	11.8	丸底	ヘラミガキ	ハケ目	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	——	内黒
9	7号	9	9	4.9	12.4	丸底	ヘラミガキ	ハケ目	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	——	内黒
10	8号	4	4	4.5	18.0	丸底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			内黒
須恵器坏															
1	2号	4	4	3.3	14.2	7.7	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラ切り	
2	2号	5	5	3.6	12.8	6.1	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラ切り	
3	2号	6	6	3.3	13.6	6.4	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	
4	3号	3	3	4.4	13.4	5.3	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	墨書
5	3号	4	4	4.1	12.2	6.0	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	墨書
6	5号	3	3	4.1	13.6	5.6	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	
7	7号	10	10	3.1	10.6	丸底	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ヘラ切り	

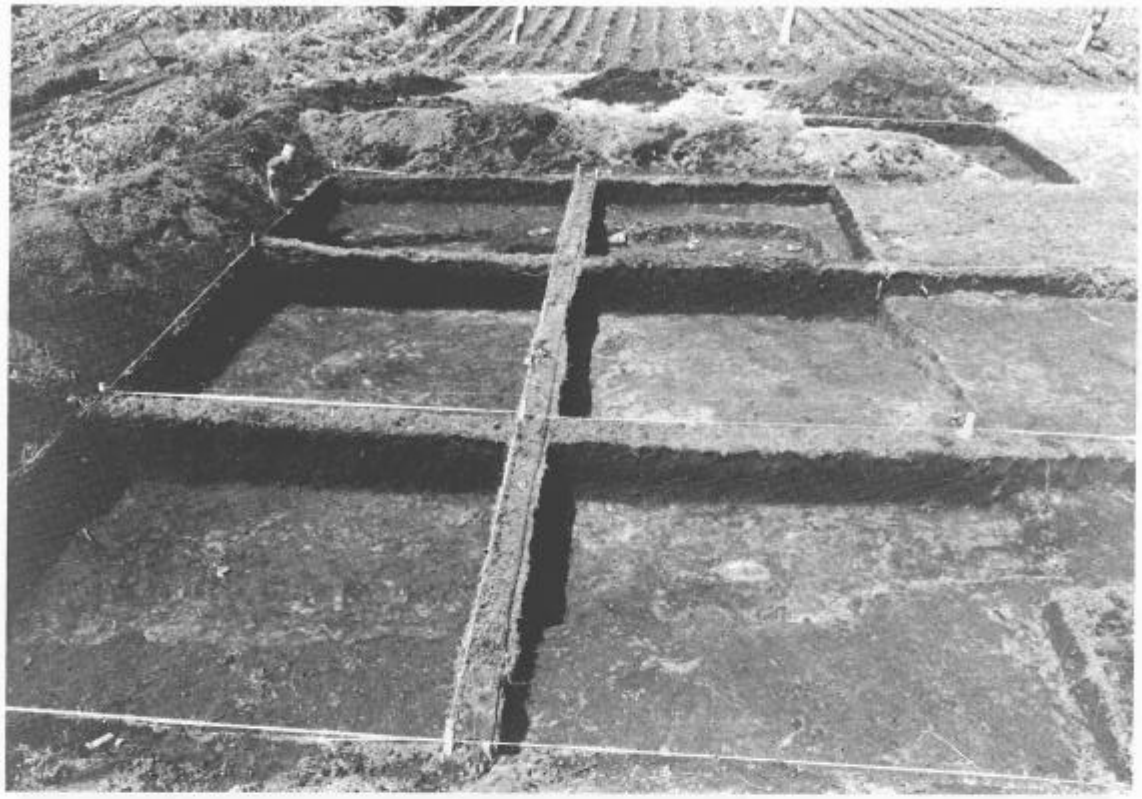
出土土器表 III



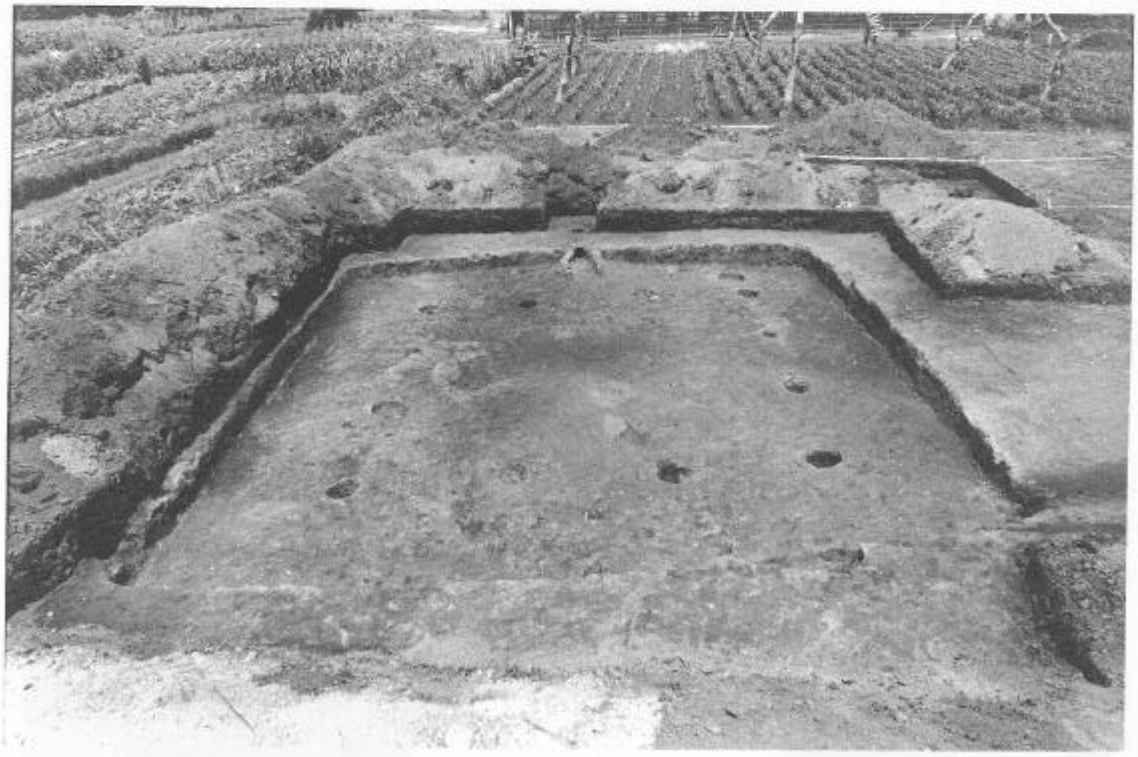
発 掘 調 査 風 景

遺 跡 遠 景

図版 1

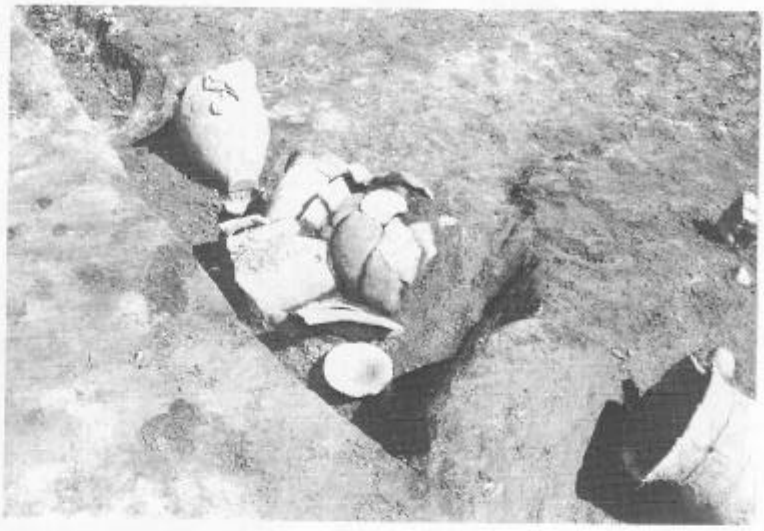


第1号住居跡とグリット調査



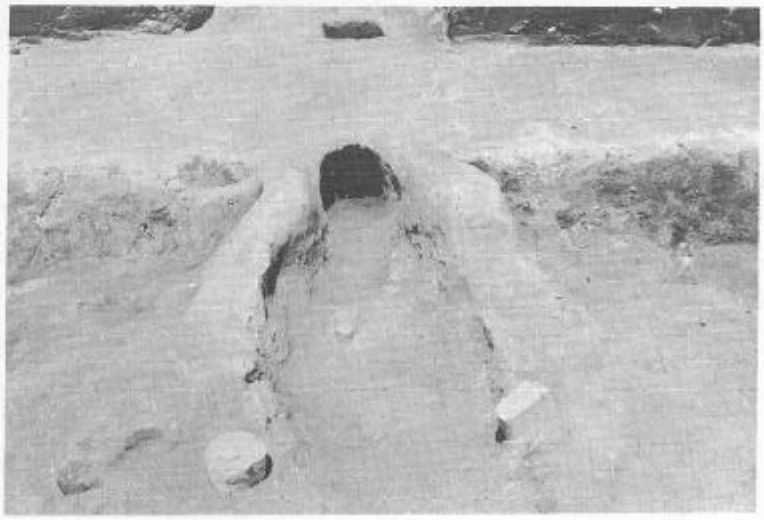
第 1 号 住 居 跡

図版2



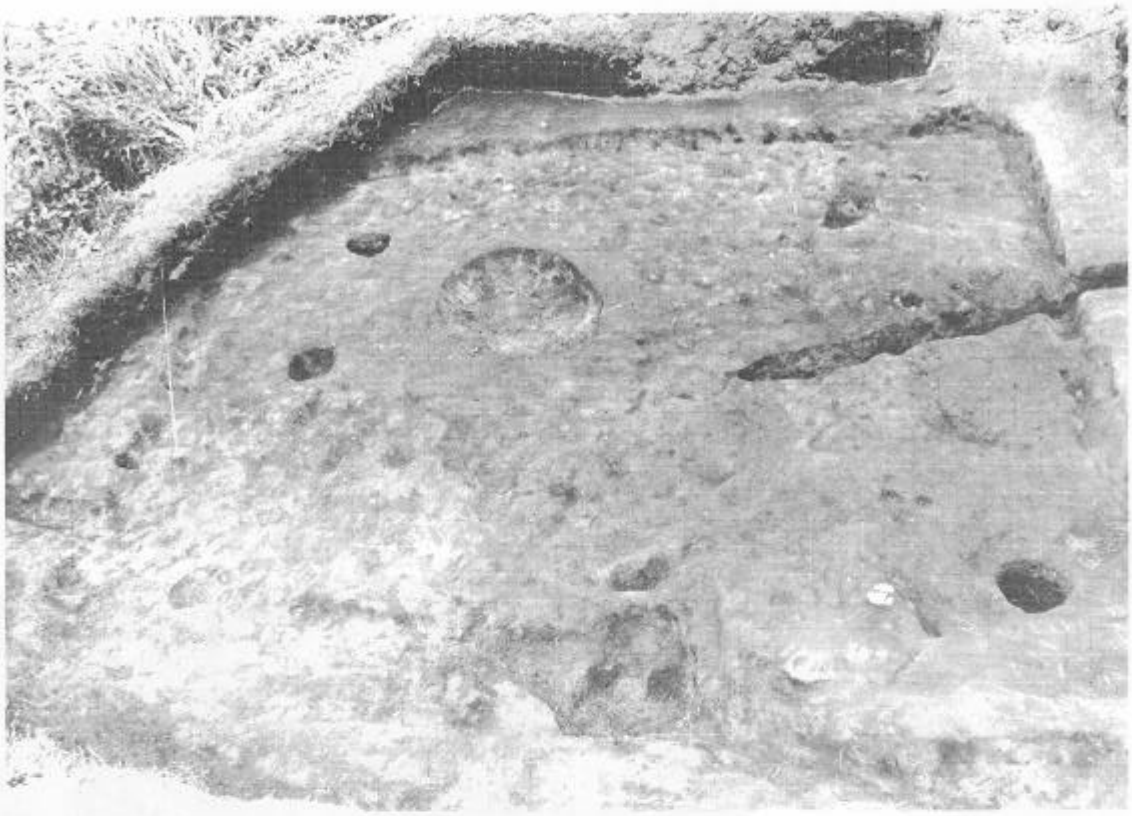
第１号住居跡
遺物出土状態

第１号住居跡
カマドと出土土器

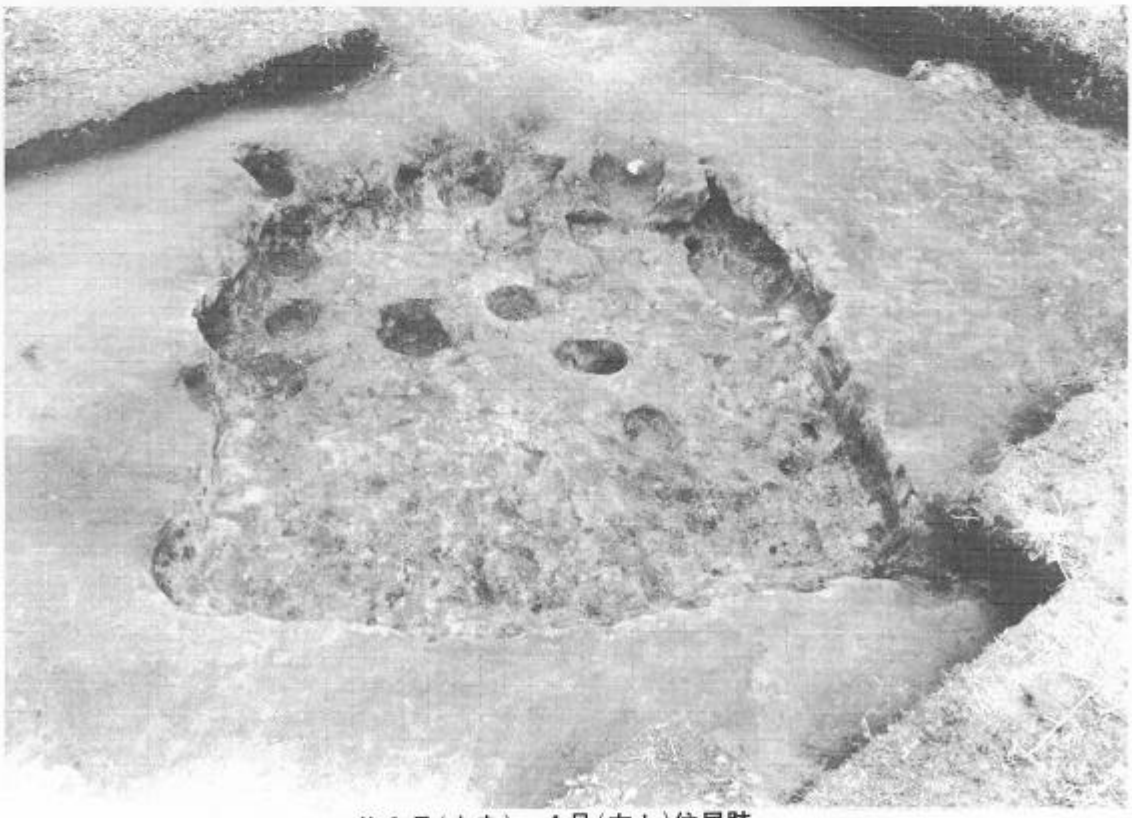


第１号住居跡
カ　マ　ド

図版３



第 2 号 住 居 跡



第3号(中央)・4号(右上)住居跡

図版4

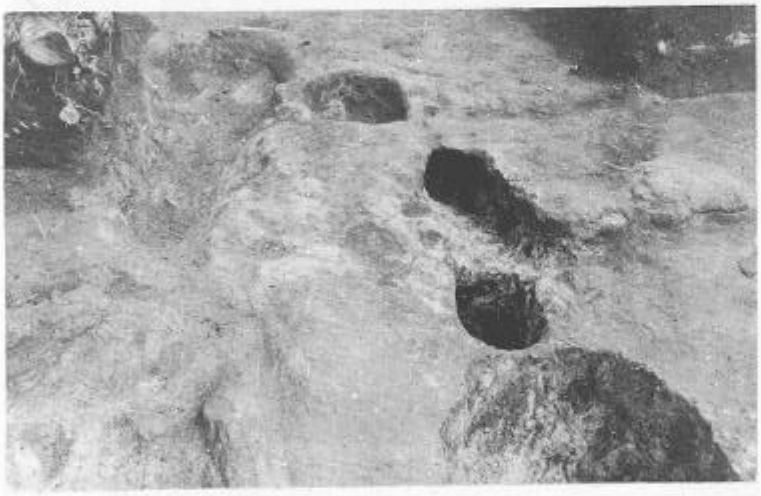
第２号住居跡
カ　マ　ド

第３号住居跡
カ　マ　ド

第４号住居跡
カ　マ　ド

図版５

第5(中央)・第6号(左下)
住居跡

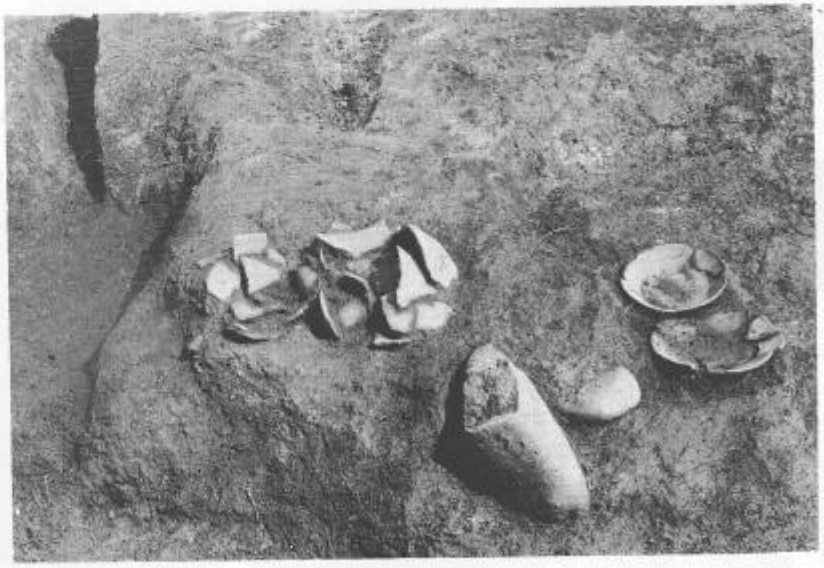


第5号住居跡
カマド

第6号住居跡
カマド

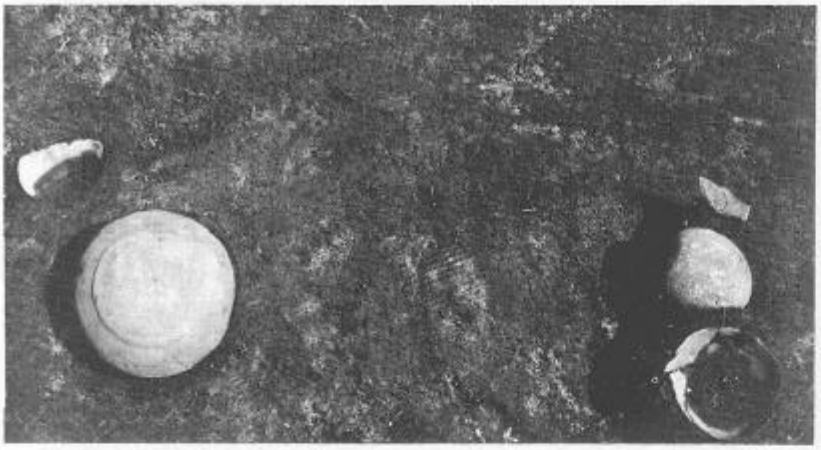
図版6

第 7 号 住 居 跡

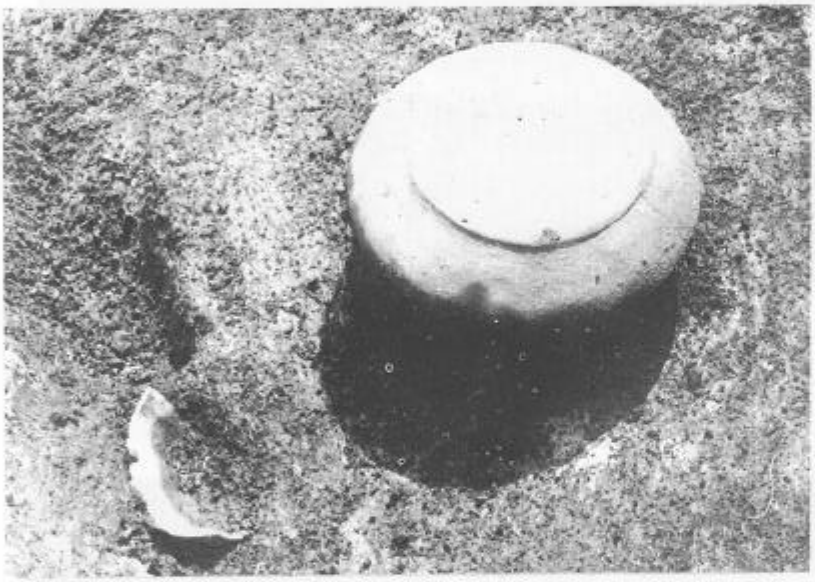


第7号住居跡
カマド

図版 7



第７号住居跡
出土遺物状態



土師器杯（右上）と
須恵器杯（左下）

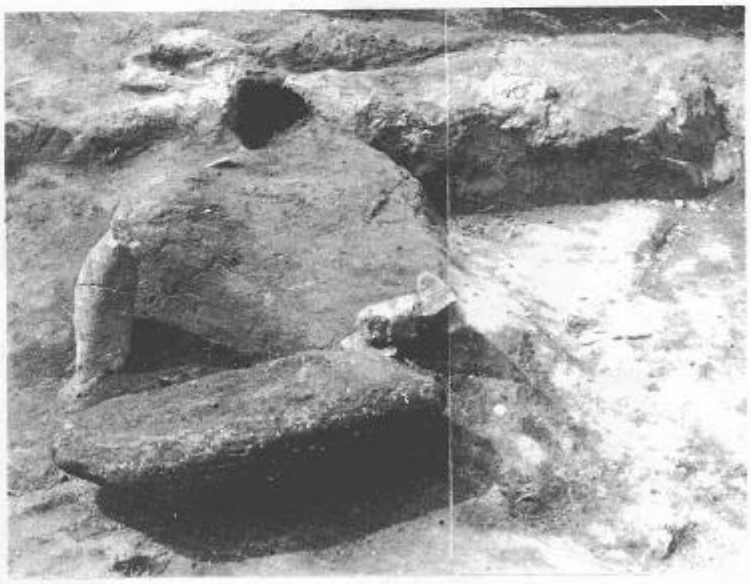
高　坏

壺

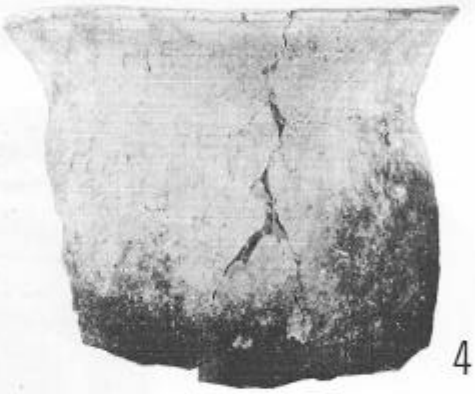
第７号住居跡遺物出土状態
図版８

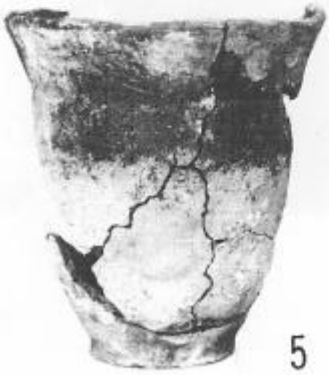
第 8 号 住 居 跡

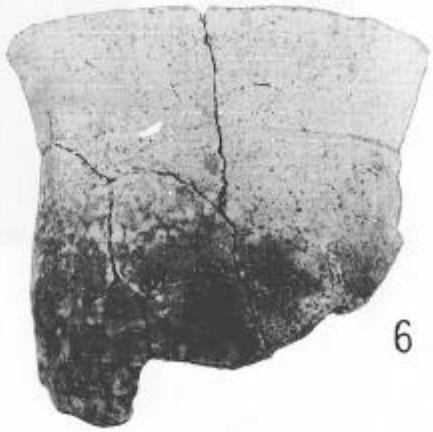
第8号住居跡
カマド



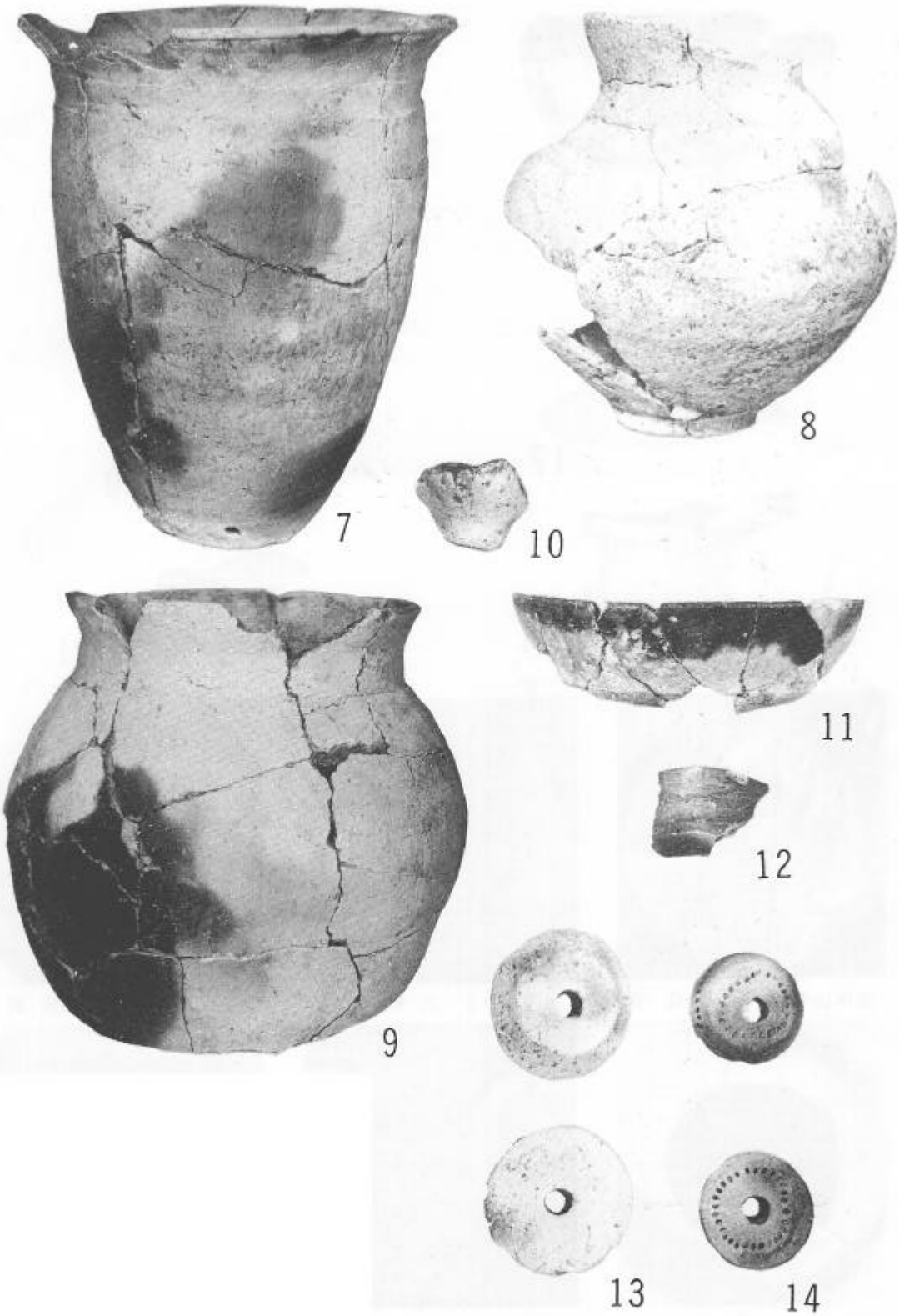
図版 9



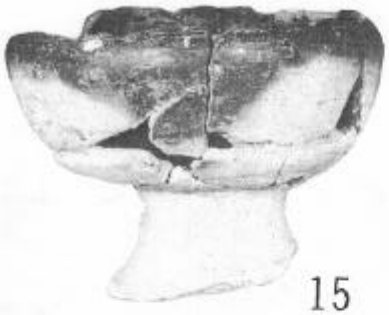


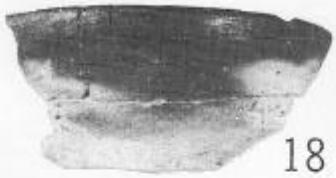


図版10　第1号住居跡出土遺物 (1)



図版11　第１号住居跡出土遺物 (2)

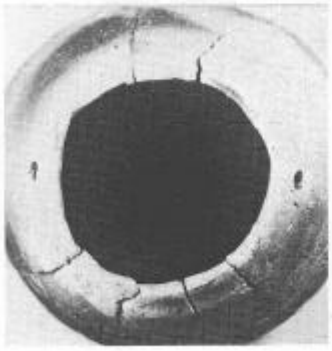




図版10の1　土器底部

図版10の2　土器底部

図版10の5　土器底部

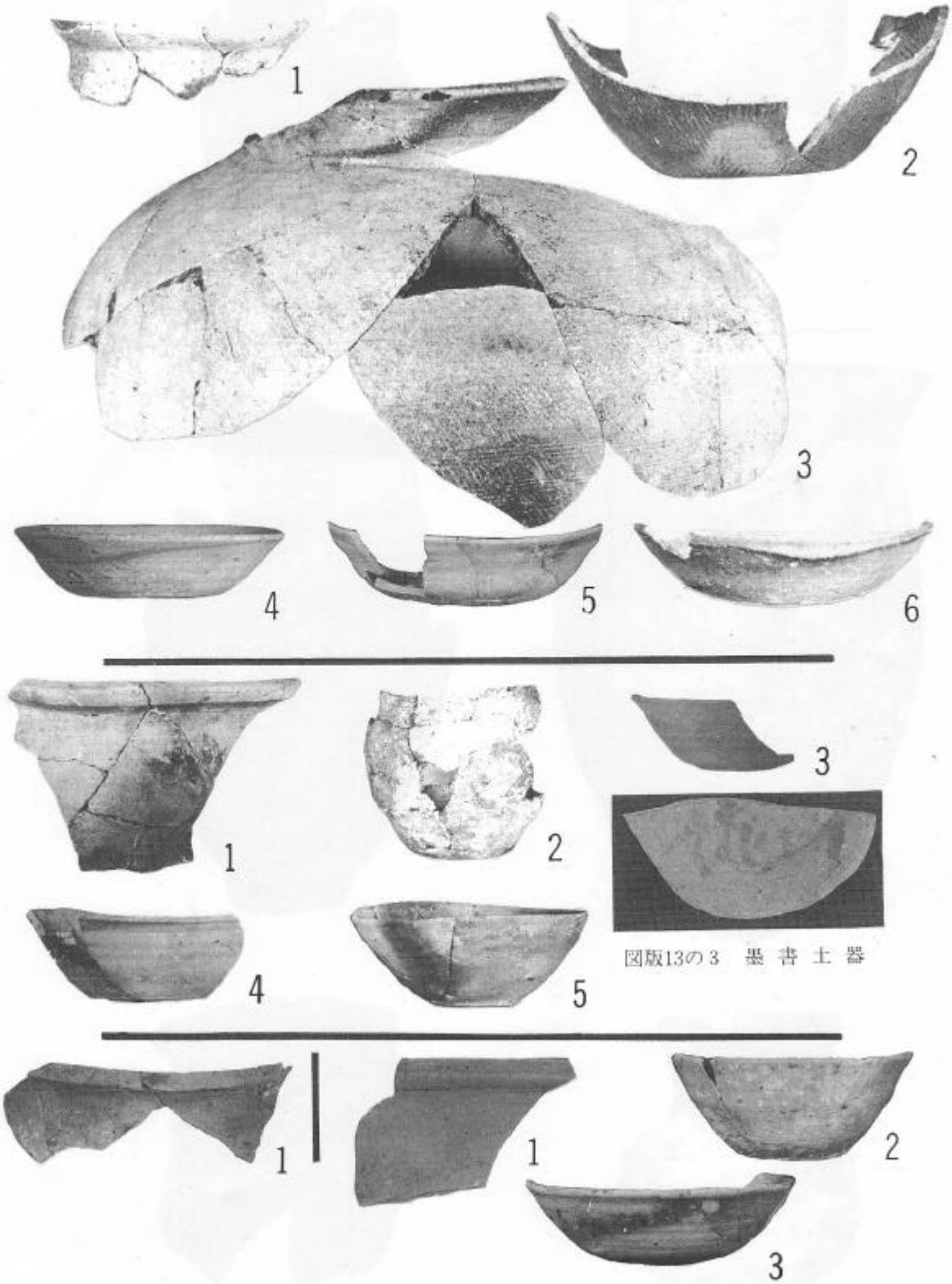


図版10の2　土器底部

図版10の1　土器底辺

図版10の3　土器底部

図版12　第1号住居跡出土遺物 (3)



図版13　第2号(上)・第3号(中)・第4号(右下)・第5号(左下)出土遺物

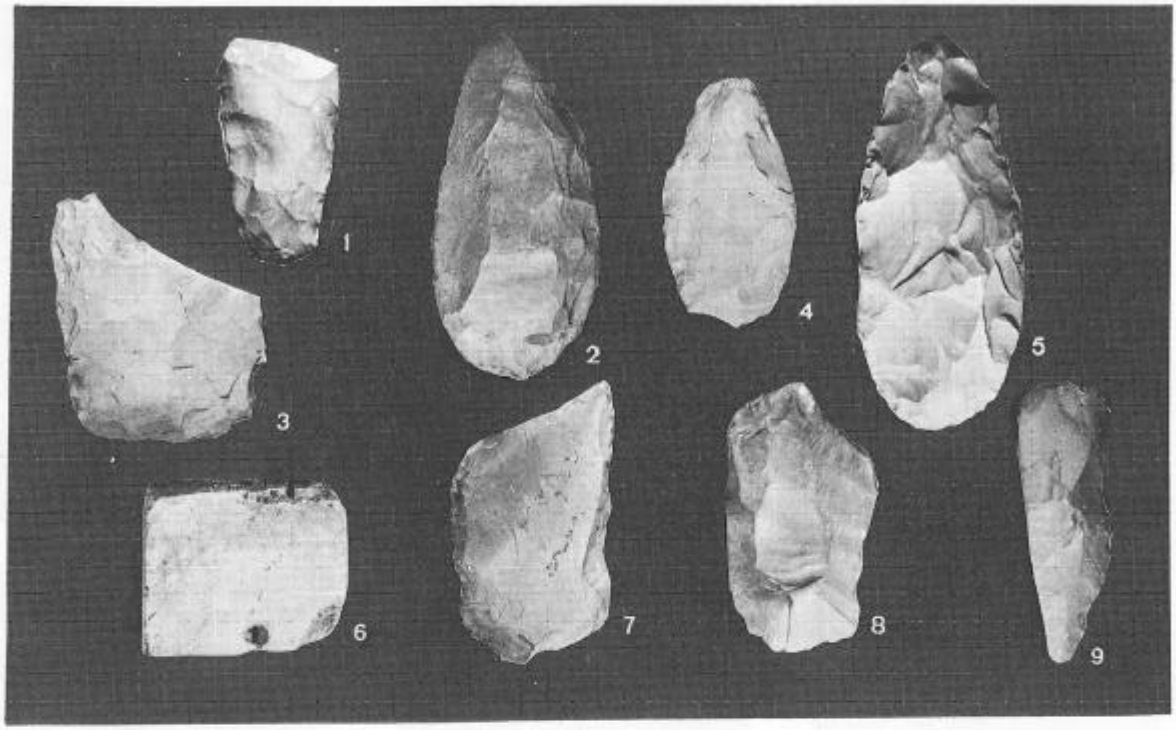
図版14　第６号(上)・第７号住居跡出土遺物

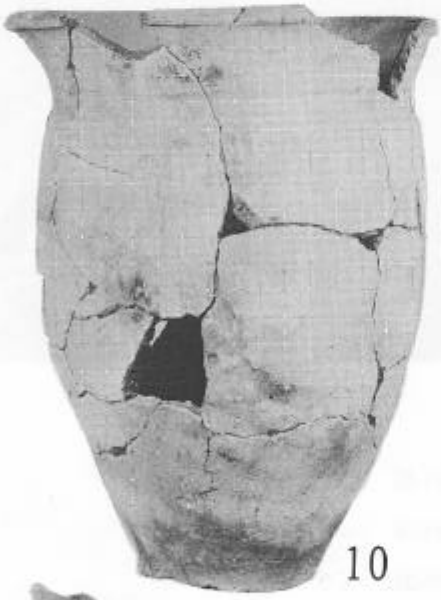
図版14の3　土 器 底 部

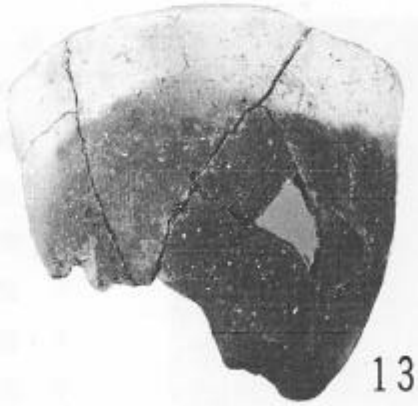
図版15の10　土 器 底 部

図版15　第7号住居跡出土遺物

図版16　第8号住居跡出土遺物







図版17　その他の出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

器面調整

1　甕　胴部　外面　刷毛目

2　甕　胴部　外面　ヘラミガキ

3　壺　胴部　外面　ヘラミガキ

4　甕　頸部　外面　刷毛目と横ナデ

5　甕　胴部　内面　刷毛目

6　甕　胴部　外面　ヘラミガキと刷毛目

7　壺　頸部　外面　ヘラミガキ

図版18